

2. 地域活性化に向けた理解醸成への取組詳細

本事業実施地域において、なぜ本事業に取り組むことになったのか等、事業実施に至った背景・経緯等の概略を整理した。

(1) 宮城県栗原市

①これまでの取組

宮城県栗原市

栗原市は平成 17 年に 10 町村が合併してできた市である。旧 10 町村の意識の乖離を埋め栗原市としての地域一体感を創出する必要があるとし、そのためのキーワードを“観光産業づくり”に設定。これまでに国土交通省が実施する地域活性化事業等を利用しながら、その実現を図るために活動中。

1. 栗原市概要

- 人口：75,760（平成 23 年 12 月末現在）
- 行政面積：804.93 km²
- 栗原市は宮城県の内陸北部に位置し、岩手県・秋田県の両県に接している。面積の約 8 割は森林・原野・田畑が広がる。市内北部には 1,627m の栗駒山がそびえ、東西には迫川が流れている。
- 栗原市は平成 17 年 4 月に栗原郡 10 町村（築館町・若柳町・栗駒町・高清水町・一迫町・瀬峰町・鶯沢町・金成町・志波姫町・花山村）が合併して誕生。
- 合併以来、市民との協働方策を検討しており平成 19 年 3 月に総合計画を策定しまちづくりに取り組んでいる。
- 平成 20 年 6 月 14 日「岩手・宮城内陸地震」が発生。最大震度 6 強を観測し、死亡者（13 人）、行方不明者（4 人）、負傷者（180 人）は 197 人に上り、被害戸数は 2,820 戸。市内各地において土砂災害が起こった。



2. 栗原市における地域活性化の取組概要

(1) これまでの地域活性化の取り組み経緯

- 栗原市は平成 17 年 4 月の合併により誕生し、基幹産業である農業・商店・企業等の活性化、雇用の場の創出等を期待し、市内にある地域資源を活かした観光産業づくりを目指すこととした。
- 合併前は、それぞれの町村がバラバラで取組を行っていた。市内東部にある伊豆沼・内沼は貴重な野生生物が多く生息する湿地としてラムサール条約の登録指定を受けており、冬は、栗駒山に近い北西部では雪が多く、平野が連なる南東部では雪が少なく温暖であるなど地域差がある。そのような自然環境と点在する温泉・名跡等の資源を別々に活用するだけであった。しかしながら、合併を契機に、古くから伝わる歴史・農山村における生活文化、食文化、伝統芸能、祭り、特産品などの魅力的な資源があることから、それらを如何にハード施設と結び付けソフト事業を展開していくかを検討した。
- 前述のように栗原市の面積の約 8 割は森林・原野・田畑であり、豊かな田園風景が広がることから自然・歴史・食・人情味あふれる人々を如何につなぎ感動を与えるかがポイントになるとし一時的で行政主導の観光振興策ではなく多くの市民が主体となり元気になる観光産業づくりを目指すこととした。
- その推進組織として栗原市では、平成 18 年 10 月に「田園観光都市室」を設置。国土交通省が実施する地域振興アドバイザーや若者の地方体験交流支援等の制度を活用しながら、地域資源発掘・活用方法検討について調査研究活動をスタートさせた。
- なお、市民ボランティア団体設立、栗原市にゆかりのある人物によって構成されるふるさと応援団が創設され、「市民が主体」となった観光産業づくりの素地づくりを確実にしている状況である。

(2) 復興まちづくりに関して

- 平成 21 年 3 月、栗原市震災復興計画が発表される。10 年スパンの計画であり、市民生活復興はもとより地域防災力強化のために NPO との協働が強く謳われている。
- 特に、地域コミュニティの再生には力点が置かれ、被災した集会施設などのハード整備は勿論のこと、住民同士の安否確認の必要性が再認識され住民啓発やコミュニティ活動への支援等を行うことが掲げられている。
- 実際に、復興まちづくり活動の支援組織として、くりこま耕英震災復興の会、花山震災復興の会などが任意団体として組成され復興計画策定に関与している、現在、復興まちづくりの観点から自主防災組織へのアドバイスやアーカイブスの整理等を行っている。

- また、復興に向けては市民が安心して生業を営む状態にすることが必要不可欠であるとし、その手段としてツーリズムを積極的に活用している。「くりはら博覧会“らいん”」の実施は、その成果の一つといえる。

栗原地域の復興と産業振興の概念




「くりはら博覧会“らいん”」概要

「栗原市の魅力を交流しながら体験する博覧会」であり、開催期間中に、栗原市をフィールドにした複数のプログラムを提供する。プログラムは、歴史や食など様々な地域資源を活用して作成されたものであり、プログラム提供者である栗原市民の専門性や得意分野を活かし、さらに一手間かけたものとなっている。訪問客には交流と体験を通じて、栗原市の魅力を楽しみながら体感することができると好評を博している。

くりはら博覧会“らいん”2011秋

- 事業名/くりはら博覧会“らいん”2011秋
- 期間/2011年10月1日(土曜日)から11月27日(日曜日)まで 56日間
 ※11月19日(土曜日)から日程を延長
- プログラム/41プログラム ● 場所/栗原市内
- 主催/くりはらツーリズムネットワーク
- 特設サイト/<http://kuriko.jp/bindahe.jp/line2011/>



(3) これまでに実施されてきた主な地域活性化の取り組み概要

○観光産業づくり

- 人口減少や少子高齢化がつづく中で地域の活性化を図るためには雇用を創出し、活力のある地域経済づくりが必要であるとし「観光」は市民が携われる裾野としては広く大きな経済効果が期待されることから「観光産業づくり」に着手。
- 従来型の観光ではなく、6次産業として観光産業を創るというものであるため観光関連産業のみならず食品加工業、製造業・サービス業に従事する企業や市民が参加した。

○田園観光室の設置

- 栗原市としては、産業経済部商工観光課内に「田園観光都市室（くりはら研究所）」を設置。専任職員を置いた。田園地域の魅力は「光」を「魅せる」ことで交流を促し活性化を図るというもの。そのために市内の資源や活かし方を調査・研究しつくすことを意味して「くりはら研究所」を呼称とした。

《くりはら磨き隊・くりはら輝かせ隊》

- 市民参加型の観光産業づくりを進めるため「くりはら磨き隊」を設置。地域資源発掘会議を開催し、資源の調査確認を行うとともに資源マップづくりのための位置確認等の作業を実施。さらに地域のリーダーを担って頂くためにも地域資源の活かし方や観光ボランティアのあり方等についても適宜検討を重ねている。
- 観光振興を図るためには外部からの応援が必要不可欠だとして「くりはら輝かせ隊」を設置。在京、在仙の栗原市にゆかりのある方や関係者の中から「栗原を応援し栗原を輝かせたい！」と考えている方に会員になってもらうというものである。会員には毎月メールマガジンを送付しており観光産業づくりの取組状況や栗原市で開催されるイベント情報等を伝えている。また、食の魅力を伝えるとして東京・仙台で年1回交流会を開催しており、年々参加人数も増えている。

《若者の地方体験交流支援（地域づくりインターン）》

- 都会の若者に地方での生活体験や交流を通じて田舎暮らしの素晴らしさを体験してもらいUJIターンのきっかけを創るとともに、地域住民には外部の人を受け入れる力をつけて頂くことを目的に「若者の地方体験交流事業」を平成19年度から行っている。栗原市では派遣された若者を活用し、地域での交流事業やくりはら研究所が進めている地域課題等について分析をしてもらいながら、観光産業づくりに向けた意見や提案を引き出している。

《地域資源データベース・マップづくり》

- くりはら磨き隊や若者の地方体験交流支援等により調査・発掘した資源をデータベースとして、59項目に分類し取りまとめを行った。なお、市全体が広域であるため地区毎に調査した資源内容を地図にプロットして地域資源マップを作成しており、観光ルート形成等の基礎資料として活用されている。

《シンポジウム等の開催》

- これまでの資源調査・発掘の中で見つけた栗原市の魅力の発表と今後の事業展開を広く地域住民に知らせるとともに理解醸成を図るきっかけとして講演会やシンポジウム等を開催。講師やパネリストの方々は、今後の観光産業づくりの進め方などを示唆して頂くとともに、地域住民が主体となった地域活性化取組の必要性等について講義頂いている。

◆小講演会

- 第1回観光産業づくり小講演会
- 第2回観光産業づくり小講演会
- 第3回観光産業づくり小講演会
- 第4回観光産業づくり小講演会

◆シンポジウム

- 観光産業づくりシンポジウム2006
- 観光産業づくりシンポジウム2008
- 観光産業づくりシンポジウム2009

《日常的なPR・活動参画の呼びかけ》

- くりはら研究所の活動内容を広く周知し、各種事業参加の呼びかけを行う一環として、市広報とは別に平成18年12月から『くりはら研究所だより』（URL：<http://www.kuriharacity.jp/kuriharacity/contents/work/kankoproject/dayori/index.html>）を発行している。約27,000部発行しており、市内全世帯に配布するとともに、市外の有識者や国・県の関係者など、観光産業づくりの支援者・協力者にも送付している。
- 内容は「若者の地方体験交流支援」「くりはら博覧会“らいん”」「シンポジウム開催・結果報告」等、栗原市で実施される各種事業について写真とともにわかりやすく掲載されておりレイアウト等に関しては地域住民が各種事業等に参加・参画意欲が高まるように工夫されている。

【日時】10月7日(金)

午前10時～午後3時30分

【内容】第1部 講座【栗駒総合支所大会講堂】

午前10時～正午 講義「資源の観方・観つけ方」

写真家・藤田 洋三 氏



第2部 フィールドワーク【栗駒松倉地内】

藤田 洋三 氏も同行します。

午後1時～ 「ねじりほんによ」の作成体験

指導 菊地 初佳 氏(栗駒松倉)

午後1時45分～ カメラを持って里山散策

午後2時30分～ 撮影した写真でディスカッション

- 定員 第1部 50名
第2部 25名
※第2部のみ参加は不可
※定員になり次第締め切り
- 参加費 無料
- 持ち物 筆記用具、カメラ、
第2部参加の場合は長ぐつ
- 服装 動きやすい服装
- 申込 9月30日(金) 午後5時まで
くりはら研究所に電話で申込み



写真家・藤田洋三氏を講師に招き、講義と地域資源の一つである「ねじりほんによ」を使ったフィールドワークを通じて、地域資源の観つけ方や観察の方法、視点などを学びます。

募 集
くりはら観光塾
写真家・藤田 洋三 氏に学ぶ
資源の観方・観つけ方

写真家・藤田洋三氏を講師に招き、講義と地域資源の一つである「ねじりほんによ」を使ったフィールドワークを通じて、地域資源の観つけ方や観察の方法、視点などを学びます。

「旅の図書室」

【開設場所】 田園観光課事務室内
(JRくりこま高原駅内)
【利用時間】 午前8時30分～午後5時30分
(土・日曜日、祝日を除く)

ツーリズムや観光に関する本、情報誌等を多数揃えています。お気軽にご利用ください。

◆今月の本③◆

『これでわかる！ 着地型観光地域が主役のツーリズム』

【編著】尾家 建生・金井 萬造
現在、着地型観光は全国各地に広がり、ツアーの内容も農林漁体験、定住体験、各種観光体験、町並み歩き、遺産観光、ヘルスツーリズム、達人の案内するツアー、エコツーリズムなど多種多様です。
この本は観光客が求める視点と受け入れる着地の住民の視線から旅行商品化につながる地域資源の磨き方や活用について、全国の事例を通して学べる一冊です。



新しく架けられた丸太の橋

歩くことが困難だった、岩手県一関市鬼死地区の奥州街道に丸太の橋が架けられました。

作業を行ったのは、NPO法人東北みち会議などで構成する「街道ツーリズムネットワーク」と市ファンとの関係です。この場所は、鬼死地区の奥州街道沿いにあるため、1年以上前から法面が崩れ歩くことが困難でした。今回、水田の持ち主や地元建築関係者の協力を得て、全長3m、幅1.2mの丸太の橋が架けられました。この丸太の橋で、肘掛がり坂から大沢田坂を上り、県境を越えて一関市鬼死地区までの散策が楽しめるようになり、街道ファンも熱い思いと素敵な活動です。



活動レポート
観光活動支援
蘇った奥州街道

交流と体験のプログラムでくりはらを体感できる50日間

くりはら博覧会“らいん”2011秋 参加者募集中



- 食べらいん** 農家レストランやカフェで、食をしながら楽しむプログラム。素敵な空間で、食を体験できます。
- やってみらいん** 料理や加工、作業を体験するプログラム。自分で作ったものを食べる企画もあります。
- こさいん** みんなで集まって飲んだり、お話を聞いたりして、地域の魅力を交流しながら学ぶプログラム。今まで知らなかった栗原のことがわかります。

広報くりはら第125号(9月1日発行号)でお知らせしましたが、この事業は10月1日(土)から11月19日(土)までの50日間の開催期間中、くりはらツーリズムネットワークの会員が栗原市をフィールドに専門性や得意分野を生かした様々なテーマで41のプログラムを提供します。
この機会に、プログラムを通じてぜひ栗原の魅力を再発見してください。
なお、各プログラムの詳しい内容は、下記ホームページ等でご確認ください。

- 主催・申込先 くりはらツーリズムネットワーク
- 電話 23-0050
- 受付時間 午前10時～午後5時(日曜日・月曜日、祝日を除く)
- URL <http://ktnpr.web.fc2.com/>
- Eメール kurihara.tn@gmail.com

くりはら博覧会“らいん”2011秋 オープニングイベント『あつまらいん』

- 日時 10月1日(土) 午後1時30分～4時20分
- 会場 一迫ふれあいホール
- 参加費 500円(映画上映会のみ負担。小学生以下は無料。)
- 主な内容 13:30～14:30 オープニングセレモニー
14:30～15:00 研究発表「地域活性化プロジェクト」
【宮城県一迫商業高等学校 商業研究部】
15:00～16:20 映画上映会『幸せの経済学』

写真展 栗原の魅力 ～までな暮らしの小さな宝物～



くりはら研究所が資源調査の活動のなかで撮影した写真を展示します。今回のテーマは「までな暮らしの小さな宝物」として、タマネギや干し大根を干す軒下、野菜の植え付け、収穫した大豆で味噌を作る様子など、市民のまでな(丁寧な)暮らしが伝わる、日常生活の印象的なシーンを撮影した写真を展示します。

- 【期間】 10月1日(土)～25日(火)
3日(月)、11日(火)、17日(月)、24日(月)は休展
- 【時間】 午前8時30分～午後6時30分
*最終日は午後3時まで
- 【会場】 一迫ふれあいホール・ホワイエ
所在地：栗原市一迫真坂字高橋20-1
- 【展示数】 約50点
- 【観覧料】 無料

田園観光都市の創造に取り組み「くりはら研究所」の広報紙

田園観光都市の創造に取り組む「くりはら研究所」の広報紙

くりはら研究所だより

57

活動レポート

観光活動支援

「子ども達の元気な笑顔」

伊里前小学校農家民泊受け入れ

9月13日(火)〜14日(水)の泊りで、南三陸町伊里前小学校児童が花山地区の農家に民泊しました。



指導を受けながら初めてのそば打ち体験



慣れない手つきながら、牛の世話も挑戦しました

南三陸町立伊里前小学校では、14年前から毎年、国立花山青少年自然の家で、5年生の宿泊学習を実施しています。昨年11月、この花山合宿に農家民泊を組み入れたいと学校側から相談を受け、くりはら研究所と市内のツーリズム実践者で構成するくりはらツーリズムネットワークが共同

で、受け入れ農家との調整やプログラムの企画などを支援してきました。今回協力をいただいたのは花山地区の6軒の農家で、事前に食品衛生について勉強したり、避難経路や消防設備を確認したりして、安全に児童を受け入れられるように体制を整備してきました。児童は男子13名、女子12名の25名。初めての民泊に少し緊張した様子でしたが、楽しみにしていただけに、野菜の収穫やまき割り、牛の世話、夕食の支度など、積極的に取り組んでいました。中には、自分で収穫したのきや野菜を食べるに、嫌いな野菜を食べ

られるようになった児童や、そば打ち体験のおもしろさから、将来はお蕎麦屋さんになると張り切っている児童もいました。

受け入れ農家からは、一生懸命に農作業の手伝いをする子どもたちの姿や、素直で純粋な姿勢にふれ、「1泊2日では短すぎる。今度は2泊3日にしてはどうか」という感想が聞かれました。また、「今度は家族や地域ぐるみで来てほしい」と子どもたちに付き合えばよかったと期待していました。

くりはら博覧会

交流と体験のプログラムでくりはらを体感できる50日間

「くりはら博覧会 “らいん” 2011秋」開催中

10月1日(土)から11月19日(土)までの50日間、市内をフィールドにした41種類のさまざまなテーマのプログラムを提供しています。

10月16日(日)以降で申し込みが可能なプログラムは、14プログラムあります。この機会に交流と体験のプログラムを通じて栗原の魅力を再発見してみたい方はいかがですか？

主催・申込先 くりはらツーリズムネットワーク
電話 (23) 0050
受付時間 午前10時〜午後5時
URL http://ktnpr.web.fc2.com/ E-メール kurihara.tn@gmail.com

●申し込みが可能なプログラム ※定員に達した場合、その時点で締切となります。

No.	プログラム名	実施日	申込締切	参加費	定員
5	紙で作るアクセサリ「ロザフィ」教室	10/28(金)	10/22(土)	4,000円	10名
17	ほそくら釜山遠足！もう一度	10/22(土)	10/18(火)	1,500円	15名
27	12月に贈ろう！シクラメンの育て方	10/25(火)	10/21(金)	3,000円	10名
29	「互市でくたく歩き」in高清水	10/29(土)	10/25(火)	500円	20名
30	ソーセージ作り教室	10/29(土)	10/19(水)	2,000円	20名
31	“米粉パンとブルーベリージャム”手作り体験	10/30(日)	10/20(木)	2,000円	10名
32	I, J, U(移住)ターンのつどい	10/31(月)	10/24(月)	1,000円	20名
33	蕎麦と民話で秋の夜長を楽しむ。	11/1(火)	10/26(水)	2,500円	15名
35	紅葉の奥州街道時代ウォーク	11/3(木)	10/26(水)	2,000円	50名
36	花山新そば・そば打ち体験	11/9(土)	11/5(土)	1,500円	30名
37	伊豆沼・内沼「夕」フォト「雁のねぐら入り」	11/10(木)	11/8(火)	500円	20名
38	伊豆沼・内沼「朝」フォト「雁の飛び立ち」	11/11(金)	11/8(火)	500円	20名
40	わたし好みの珈琲「自分焙煎」	11/12(土)	11/2(水)	2,500円	10名
41	はっとう、ねっけ豆教室	11/15(火)	11/8(火)	2,000円	18名

活動レポート

「羽後岐街道『長屋門』巡り」に参加

「くりはら長屋門研究会」がいよいよ活動を開始。10月2日(日)、くりはら博覧会「らいん」のプログラム「羽後岐街道『長屋門』巡り」に参加しました。

くりはら長屋門研究会は、市内に50軒以上現存する長屋門の歴史や使われ方、建物の構造などを調べたり、観光としての活用の可能性について考えたりしながら研究活動を行います。今回「くりはら磨き隊」が主催で実施した「羽後岐街道「長屋門」巡り」に参加し、栗駒文字地域の長屋門を視察しました。



栗駒文字地域の長屋門を紹介「くりはら長屋門」

栗駒文字地域は二迫川水系に位置し、伊達領から羽後秋田への交通の要所として古くから開けていた地域で、現在、番所門や街道沿いにみられる旧家の土蔵、長屋門など、歴史を物語る数々の道跡が残されています。



長屋門視察の様子

今も10軒に1軒の割合で長屋門が建ち、米文化の名残として農村の風景が残る貴重

【随時募集中】

くりはら長屋門研究会では、一緒に研究活動できる方を随時募集しています。栗原にお住まいの方や、研究会の活動に興味のある方や長屋門が好きな方歓迎です。興味のある方は、くりはら研究所までご連絡ください。

【発行】くりはら研究所 (栗原市 産業経済部 田園観光課) 〒989-5612 宮城県栗原市志波姫新熊谷284番地3 (JRくりこま高原駅内) tel. 0228(22)1151 fax. 0228(23)5370 mail kanko@kuriharacity.jp url http://www.kuriharacity.jp/ (栗原市ウェブサイト⇒市政情報⇒くりはら研究所)

写真展 栗原の魅力

～まで暮らした小さな宝物～



期間 10月25日(火)まで
*月曜日は休展
[時間] 午前8時30分～午後6時30分
*最終日は午後3時まで
[会場] 一迫ふれあいホール・ホワイエ
[展示数] 50点
[観覧料] 無料

「旅の図書室」

○開設場所 田園観光課事務室(ＪＲくりこま高原駅内)
○利用時間 午前8時30分～午後5時30分
(土・日曜日 祝日を除く)

ツーリズムや観光に関する本、情報誌等を多数揃えていますので、お気軽にご利用ください。

「しあわせ農泊」

日本のグリーンツーリズム発祥の地、大分県・安心院地区。「農家民泊」の生みの親が語る「ムラの幸せを求めた仲間たち」の15年。真の豊かさとは何かと日本人に問いかける一冊です。



【発行】くりはら研究所 (栗原市 産業経済部 田園観光課) 〒989-5612 宮城県栗原市志波姫新熊谷284番地3 (JRくりこま高原駅内) tel. 0228(22)1151 fax. 0228(23)5370 mail kanko@kuriharacity.jp url http://www.kuriharacity.jp/ (栗原市ウェブサイト⇒市政情報⇒くりはら研究所)

くりはら研究所だより

58

田園観光都市の創造に取り組み「くりはら研究所」の広報紙

活動レポート

若者が地方の暮らしを体験 地域づくりインタビュー事業

「普段の農家の暮らし」をテーマに、都会の学生が、9月27日(火)から30日(金)まで3泊4日の日程で、花山の農家に民泊しながら地方の暮らしを体験しました。

くりはら研究所では、平成19年から田舎暮らしに興味を持つ都会の学生を受け入れていきます。今回、インターン事業に東京の大学院に通う学生1名が参加し、



「ほんによ」が立ち並ぶ景観を見学

地域資源の調査や体験を通して、栗原市の魅力を体験しました。

資源調査では、若柳地区の細織物工場や畳工場でお話を聞いたり、くりはら田園鉄道旧若柳駅舎や一迫地区の長屋門を見学。参加者は都会での生活が長く、山や川、田んぼなど、農村の風景を身近で見るとは初めてで、「ほんによ」の形や構造に特に興味津々でした。

受け入れ先の農家では、農村に暮らすための知恵や



真ん中に振りおろすのは至難のワザ

技に触れながら、普段の暮らしを体験しました。この農家では薪を使った生活を送っていて、この時期冬に備えて多くの薪を蓄えておく必要があるため、斧の使い方を教わりながら薪割りのお手伝いを行いました。他にも、竹やぶをかき分けながらのキノコ採りや、地域の窯元で焼きあがった陶器磨きなど、自然豊かな農村ならではの体験をしました。また、花山地区の方々の交流会を行い、農村の暮らしの魅力や都会から見る農村の姿などについて意見を交わしました。

「旅の図書室」

○開設場所 田園観光課事務室内「JRくりこま高原駅内」
○利用時間 午前8時30分～午後5時30分
(土・日曜日・祝日を除く)

ツアーリズムや観光に関する本、情報誌などを多数そろえていますので、お気軽にご利用ください。

◆今月の本⑤◆



『新・地域を活かす
―地理学者の地域づくり論』
著者 宮口 恒迪

「地域はもともと同じではなく、さまざまな要素(資源)と人との組み合わせを持つ。この要素の中から何を主として育てればいいのかを見極め、その使い方を磨きあげる。そのためにも、都市の住民との交流や他地域を知って初めて、その地域の何に価値があるのかをわかり、そこで地域の個性が生まれる。」
画一的でない地域づくりを目指するための一冊です。

参加者はこれらの体験を振り返って、水・空気・食べ物がおもしろいこと、苦手だった漬物も食べられたこと、時間の流れが違ったこと、時間のこと、そして何より地域の方々の温かいおもてなしが印象に残ったようです。受け入れた農家の方も、都会の若者との触れ合いを楽しみながら、普段の暮らしの中にある魅力を再発見するきっかけになったようです。

くりはら研究所では、今後もこの事業を通じ、農村の暮らしに興味ある学生を継続して受け入れていきたいと思っております。

活動レポート

夢のカタチを探してみよう 農家民宿・レストラン開業支援講座

農家民宿やレストランの開業を目指す市民を対象に、起業に向けたイメージを固め、必要な情報を収集するための場として、ツアーリズムや地域振興を研究している専門家や実践者を招いて、計4回の講座を開催しています。

第1回目と2回目の講座のポイントを紹介します。

第1回「暮らしを生かした ツアーリズムを発掘しよう」

講師 ● 宮城大学 産業構想学部 教授 宮原 育子氏

「観光」というと何か特別なことをしなくてはならないように考えがちですが、農村地域においては、暮らしそのものが来訪者にとっての非日常であり、珍しいもの、おもしろいことが詰まっています。

来訪者自身が「発見」できるような「しかけ」をいくつも持つことが重要です。



第1回の講師の宮原氏

そのためには、地域に住む人自身が、自分たちの「しかけ」になるものを発見、発掘する必要があります。

観光パンフレットで紹介されているものや場所を来訪者に伝えることも大切ですが、自分の感性で地域の宝物を掘つけ、その価値に気づく「感性のアンテナ」を磨いて欲しいと思います。

人を泊める、ものを食べべってもらうということは、単純に見えますが、芸術活動と似ています。自分の感性を磨きながら、来訪者にいろいろなることを提供して、喜びを与え、同時に自分も発見していく、一種の芸術・創造活動といえます。

第2回「農家民宿・レストラン の開業とその魅力」



第2回の講師の門脇氏

講師 ● 農家民宿 星雪館 (秋田県仙北市 門脇 富士美氏)

● 開業のきっかけは、修学旅行の農業体験を受け入れたこと、自分たちが普段やってることが、子供たちに感動を与えたり、何か心に響くものがあるんだなと子どもたちに教えられました。

● 農業体験を受け入れる時は、できるだけ自然体で、「〇〇体験」ではなく、自分たちがその日にする仕事を、子どもたちと一緒にやっていきます。

● お客さんから地域の良さや魅力などを教わるのがあり、自分も地域の歴史や食文化、人などを、もっと知ろうという気持ちになりました。

● 次号は、3回目と4回目の講座のポイントを紹介します。

募集 「くりはら長屋門研究会」 研究員を随時募集

栗原市には、米作りの歴史や、地域の人々の暮らし方を学ぶことができる地域資源として500軒以上の長屋門があります。

研究会では、この調査結果をもとに、長屋門の歴史や使われ方、構造などを調べたり、観光への活用の可能性について考えたりしながら、長屋門の価値を研究しています。

一緒に研究活動できる方を募集していますので、この活動に興味のある方は、くりはら研究所までご連絡ください。

なお、現在会員は6人です。



- [対象]** 市内にお住まいで、研究会の活動に興味のある方や長屋門が好きな方若干名
- [申込み]** くりはら研究所に電話で申し込みください。
- [内容]** 2力年の活動で、月に1回程度、学習会や現地視察、有識者を招いての研究会などを行います。

栗原市観光産業づくりシンポジウム開催

日時 12月23日(金・祝) 午後1時30分～5時

会場 一迫ふれあいホール

第一部 基調講演 午後1時40分～
「地域の価値の再認識(学び)と人材育成」

講師 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授 文学博士 宮口 備通 氏



【プロフィール】
総務省過疎問題懇談会会長、農林水産省美の里づくりコンクール審査委員、国土審議会専門委員、国土交通省地域振興アドバイザー、富山県景観審議会会長、全国市町村の道州制と町村に関する研究会委員など。

活動紹介・事例発表 午後2時50分～

- ①「地域資源を活用した交流と体験のプログラム」(発表者) くりはらツーリズムネットワーク事務局
- ②「里山の食材を活用して一地域の食文化を伝える」(発表者) 千葉 優子 氏(花山村塾)
- ③「栗原の長屋門を通じて一地域の歴史と文化を伝える」(発表者) 菅原 敏允 氏(くりはら磨き隊)
- ④「自然豊かな暮らしの中で一花山ならではの農業を体験」(発表者) 山菜茶屋 ざらぼう 伊藤 廣司 氏

第二部 ワークショップ 午後3時40分～

- ・干し大根づくり、ミニ畳づくり、漣クラフトづくりなどを体験して新たなプログラムの創出を考えます
- 宮口氏による全体講評 午後4時50分～
- 閉会 午後5時

申込み 12月21日(水)までに、くりはら研究所へ申し込みください。
(当日、午後6時から交流会を開催します。詳しくは、申し込みの際に確認ください。)



視察先の一つ 農家民宿 星雲館 (秋田県仙北市)の外観

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

●「農家民宿 一の重」
大規模稲作農家のため、農繁期の受け入れは制限。開業して、農業だけでは得られなかった業し、充実感がある。

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

●「農家民宿 一の重」
大規模稲作農家のため、農繁期の受け入れは制限。開業して、農業だけでは得られなかった業し、充実感がある。

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

活動レポート

夢のカタチを探してみよう 農家民宿・レストラン開業支援講座

農家民宿やレストランの開業を目指す市民を対象に、起業に向けた実践力を身につけられる場として、先進地視察研修や、活躍している専門家を招き、開業支援講座を開催しました。前号に続いて、第3回目と4回目の講座のポイントを紹介します。



第4回講師の宮原 育子 氏

●「農家民宿 一の重」
大規模稲作農家のため、農繁期の受け入れは制限。開業して、農業だけでは得られなかった業し、充実感がある。

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

●「農家民宿 一の重」
大規模稲作農家のため、農繁期の受け入れは制限。開業して、農業だけでは得られなかった業し、充実感がある。

●「農家民宿 星雲館」
普段の農作業や暮らしを体験してもらおうので、体験プログラムを企画している。参加者は、実践者の取り組み、工夫している点など直接お話を聞き、起業に向けてイメージを膨らませています。各視察先の取り組みの一部を紹介いたします。

くりはら研究所だより

田園観光都市の創造に取り組み「くりはら研究所」の広報紙

活動レポート

くりはら観光塾 写真家・藤田洋三氏に学ぶ 資源の観方・観つけ方

10月7日(金) 栗駒総合支所 栗駒総合支所

写真家・藤田洋三氏を講師に招き、「資源の観方・観つけ方」をテーマに講義と地域資源の「ねじりほんによ」を使ったフィールドワークを通じて、地域資源の観つけ方や観察の方法、視点などを学びました。



写真をを使って資源の観方を伝える藤田 洋三氏

●参加者 27名
藤田氏が約30年にわたって一田んぼの歴史や市内で見つけた資源の写真を説明しながら、資源の観方・観つけ方を解説しました。

●参加者 27名
藤田氏が約30年にわたって一田んぼの歴史や市内で見つけた資源の写真を説明しながら、資源の観方・観つけ方を解説しました。

●参加者 24名
フィールドワークでは、藤田氏と参加者が一緒に「ねじりほんによ」作りを体験しました。

●参加者 24名
フィールドワークでは、藤田氏と参加者が一緒に「ねじりほんによ」作りを体験しました。



菊地 初佳 氏からねじりほんによの作り方を熱心に学ぶ参加者

ねじりほんによによる米作りを20年以上行っている栗駒松倉の菊地 初佳 氏に協力いただき、美しいせん状の形に教えていただきました。

●「旅の図書館」
開設場所と利用時間
○田園観光課事務室内 (JRくりこま高原駅内)
○午前8時30分～午後5時30分 (土・日曜日 祝日を除く)
ツーリズムと観光に関する本、情報誌などを多数そろえていますので、お気軽にご利用ください。

●「旅の図書館」
開設場所と利用時間
○田園観光課事務室内 (JRくりこま高原駅内)
○午前8時30分～午後5時30分 (土・日曜日 祝日を除く)
ツーリズムと観光に関する本、情報誌などを多数そろえていますので、お気軽にご利用ください。

くりはら研究所だより

地域活性化への理解醸成 栗原市観光産業づくりシンポジウム

12月23日(金)／一迫あいホール
主催▽国土交通省国土政策局地方振興課
主管▽栗原市・くりはら研究所・リズムネットワーク
協賛▽栗原市観光物産協会・視覚総合研究所

「地域活性化への理解醸成」をテーマに、多くの方々に地域資源の価値を再認識してもらい、観光やツーリズムを中心とした地域活性化への取り組みや活動へ興味・理解をもっていただくことを目的に開催し、111名が参加しました。

第一部では基調講演と事例発表、第二部ではワークショップとして、くりはら博覧会らしいプログラムとグループワークを体験しました。

今回は、基調講演の一部を抜粋して紹介します。地域の価値を再認識することや人材の育成について講演いただき



講師の宮口氏 栗原市での講演は約2年ぶり

第一部 基調講演
「地域の価値の再認識(学びと人材の育成)」
講師 早稲田大学教育・総合科学術院 教授
文学博士 宮口 健雄氏

自らの地域を語れるようになろう

ほかの地域と比べて、自分の地域にどんな特徴があるか

を語れるようになることが大切で、例えば、栗原には長屋門があつて当たり前かと思われませんでした。しかし、これにしかない物で、「誰がいつ頃作つて、どのように使つてきたのか、このようを生かすとすればどんな使い方があろうか」というように頭が働いていきます。これが自らの地域を語れるということですね。

地域は単に客観的な存在ではない
地域にはいろいろなタイプの人がいます。これはあの人を力発揮してもらおう、これは高校生に頑張ってもらおう、など、地域の力をピックアップして繋いでいき、飛躍的な力にすることが、「協働」であり、決して抽象的なものではないですね。



シンポジウム会場の様子

人と資源をどう育てるか

「地域が活性化している」とは、色々な反応が起きて何が生まれやすい状態であることです。人と人が反応することで新しいプロジェクトが生まれ、栗原では「くりはらツーリズムネットワーク」が発足しました。人と資源が反応することで、地域資源を活用した体験と交流のプログラム「くりはら博覧会らいん」が誕生したことは大変素晴らしいことだと思います。栗原は着実に何かが生まれ、来る度に良くなってきています。

次の世代をどう育てるか

栗原にもいくつかの高校がありますが、地域の高校で何を学ぶか、そこでどうやって育つていくか、地域の将来にとって、とても大事なことです。次の世代とどうやっていい関係を作っていくかが、非常に大切ですね。

次号では、事例発表とワークショップについて紹介いたします。

活動レポート 長屋門から地域を学ぶ 第1回くりはら長屋門研究会

11月18日(金)／一迫地区「長屋門cafe」いわき花門、一関市「磐寺村荘園遺跡」

くりはら長屋門研究会は、長屋門に興味のある市民など9人で活動しており、長屋門にまつわる歴史的背景や物語、建築技術、活用・保存方法など、さまざまな視点から長屋門の新たな価値を創造するための研究を進めています。



意見を交わす研究員

【意見交換】

これまでくりはら研究所が行ってきたモニターツアーや現地調査、市民による取り組みを研究会に報告し、長屋門の使われ方や特性について意見交換が行われました。研究員からは「古き良き時代の農業経営の名残りが長屋門である」、「長屋門を郵便局として活用していた時代もあった」など、当時の文化や活用についての説明があつたほか、保存に関する課題についても意見が出されました。

【現地視察】

国の重要な文化的景観に指定されている一関市の「磐寺村荘園遺跡」を視察しました。視察地は山々に囲まれた地域で、曲がりくねった水路や不整形な水田、イグネに守られた家々など、自然を巧みに利用して築きあげてきた農村の風景が維持されており、ガイドの説明を聞きながら地域の歴史や文化を学びました。くりはら長屋門研究会の活動に興味のある方は、くりはら研究所までご連絡ください。



ボランティアガイドの話を熱心に聞く研究員

リレー随筆

栗原での生活体験を終えて

東京大学大学院学際情報学府修士2年(大阪府出身) 谷田 和章 さん



先日、栗原市の「若者の地方体験交流(地域づくりイニシアチブ事業)」に参加し、短い期間ではありましたが農家に宿泊し、普段とは違う田舎での生活を体験させていただきました。栗原市は人と自然との距離がとても近いところで、その関係によるほのぼのとした空気感に心地良いものでした。車での移動中、すぐそばで牛が当然のように歩いているのを見た時などは少し驚きましたが、山に入つて、自生しているものを採って食べるということも、経験することができました。都会暮らしではまずないことで、こちらの人々はそのようなことを普段の暮らしの一部としてしているからこそ、自然との良い関係が保たれているのだと思いました。滞在中にいただいた食事は、とてもおいしいもので、自分たちで食べるお米や野菜も、どれも自分たちで作つていました。当たり前のようなことなのかもしれませんが、しかしそれがかけがえのないことのように感じられました。だから農家の人はきっとおいしい食事でお腹を満たすことができるのだと思いました。地域の人のつながりが緊密だ



くりはら 研究所だより

地域活性化への理解醸成 栗原市観光産業づくりシンポジウム

12月23日(金) 迫ふれあいホール
主催▽国土交通省 国土政策局 地方振興課
主幹▽栗原市 国土政策課 地方振興課
協力▽栗原市観光振興協会・朝日新聞研究部

地域資源の価値を再認識し、観光やツーリズムを中心とした地域活性化への取り組みや活動に興味・関心をもってもらうことを目的に開催しました。前号に引き続き、今回は、事例発表とワークショップのポイントを紹介します。

【第1部】事例発表

●地域資源を活用した交流と体験のプログラム
くりはらツーリズムネットワーク
フリック事務局 千葉秀知氏
昨年秋に開催した「くりはら博覧会らいん」の様子を紹介しながら、参加者に栗原の魅力を再認識してもらえたと発表しました。

●里山の食材を活用して
地域の食文化を伝える
花山村塾 千葉優子氏
「コンニャク作り教室」を

例に、昔からの知恵やワザは郷土の文化であり、次の世代に伝えていくことの大切さを発表しました。

●栗原の長屋門を通じて
地域の歴史と文化を伝える
くりはらツーリズムネットワーク
長屋門を例に、身近な資源を活用したプログラムの楽しさや、地域資源の再認識の大切さを発表しました。

●自然豊かな暮らしの中で
花山ならではの農業を体験
山菜茶屋 さらばう 伊藤廣司氏



写真を使って事例発表を行いました

61
(発行) くりはら研究所
(産業経済部田園観光課)
電話番号 (22) 1151
ファクス (23) 5370
電子メール kanko@kuriharacity.jp

南三陸町立伊里前小学校
5年生の宿泊学習や、若者の地方体験交流事業で東京の大学生を受け入れたことを例に、単にイベントで終わることなく、参加者に後々まで関わってもらう仕掛けの必要性を発表しました。

【第2部】ワークショップ
実際に身近な地域資源を活用したプログラムを体験し、ツーリズムや栗原の価値、将来についてグループトークを行いました。

募集 桃の節句のちらし寿司教室

ちらし寿司は、お祝い事や来客へのもてなし、雑まつりや五月の節句などに作られる地元食。教室では、錦糸卵や海老そぼろ、寿司酢の作り方を学びます。

【日時】 3月3日(土) 午後1時30分～4時
【場所】 この花さくや館プラザ 2階 調理実習室

【対象】 18人
【参加費】 2,000円
【申込締切】 2月21日(火)午後5時まで
定員になり次第締め切ります

【持ち物】 エプロン、三角巾、筆記用具、重箱(約25センチ四方)1段

【持ち帰りの目安】 重箱1段分のちらし寿司
【主催・申込先】 くりはらツーリズムネットワーク
電話(23)0050 (日・月曜日を除く)
【主管】 くりはら食ツーリズム研究会
【協力】 くりはら研究所

グループトークでは、「らいいんの新しいプログラム」や「食に開いたコンクール」子どもが地域に求めるもの」とテーマが設定され、意見交換と発表を行いました。

全体講評で、講師の早稲田大学教育・総合科学学術院教授 宮口何雄氏は「ワークショップを通じ、参加者同士が反応することで、何かが生まれるきっかけになればいい」、「若いうちは世の中の標準より劣るのが嫌との思いがあるが、経験を重ねることで他と違ってもいいという標準に変わっていく。若者の標準的な希望を満たしつつ、いかに地域の価値を注ぎ込むかが大切」と締めくくりに言葉を述べられました。



運クラフト作りを体験

【発行】くりはら研究所 (栗原市 産業経済部 田園観光課)
〒989-5612 宮城県栗原市志波坂新郷谷284番地3(JRくりこま高原駅内) tel.0228(22)1151 fax.0228(23)5370
mail kanko@kuriharacity.jp url http://www.kuriharacity.jp/ (栗原市ウェブサイト⇒市政情報⇒くりはら研究所)

活動レポート 長屋門は大切な地域資源 第2回くりはら長屋門研究会

くりはら長屋門研究会は、長屋門に興味のある市民9人で構成し、長屋門にまつわる歴史的背景や興味、建築技術、活用・保存方法など、さまざまな視点で長屋門の価値を研究しています。

【現地調査】
くりはら磨き隊隊員でもある菅原敏允(みん)研究員(栗駒文字)のガイドで、栗駒文字の長屋門2軒と市の文化財である柿之木番所を視察しました。今回は、研究会の活動を視察に訪れた福島県喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンターの9人も一緒に参加。長屋門を間近で見ると、驚かすという参加者は、大きさに驚いたり、曲がった木を上手に組み合わせる職人のワザに



長屋門の使われ方も時代とともに変化しています

12月6日(火) 栗駒地区文字
感心したり、ガイドの菅原研究員から、昔は小作人の住居や作業場、家畜小屋として使っていたものが、今は書斎や趣味の部屋として活用している長屋門もあること、柱にはケヤキの木を使っていること、屋根は茅葺きから木羽葺きへ、さらに瓦やトタンへと

変わってきていることなど、長屋門の特徴や使われ方、構造について説明がありました。また、文字地域は藩政時代から明治交通の半ばまで、秋田への交通の要所として、人や物資だけでなく、文化の交流も盛んであったことなどを聞き、参加者は当時の想像しながら柿之木番所を興味深く眺めていました。

「長屋門は歴史的な建造物としての価値に加え、地域の文化を知る資源の一つです」との菅原研究員の言葉に、参加者はあらためて長屋門の価値や魅力に気付いたようです。

【随時募集中】
随時研究会を募集しています。興味のある方は、くりはら研究所までご連絡ください。

参加費無料 近代化産業遺産群観光ガイド養成講座

観光客などに、近代化産業遺産群や市内の観光資源の歴史、周辺情報を伝えるガイドとして、講座と実践によりノウハウを学びます

【日時】 第1回 2月28日(火) 午後7時～9時
・基礎講座 講師 くりはらツーリズムネットワーク 副会長 馬渡 達也 氏
第2回 3月8日(木) 午後7時～9時
・近代化産業遺産群及び栗原市観光資源講座
第3回 3月19日(月) 午前9時～正午
・現地実践講座として資源を見ながら学びます

第3回の詳細は、参加者に追ってお知らせします

【場所】 市民活動支援センター 多目的室 (第1回と第2回)
【対象】 観光ガイドに関心がある方で、全3回の日程に参加できる人
【申込】 2月23日(木)午後5時まで、電話で申し込みください。
【その他】 全3回の講座を受講された方に修了証を交付し、今後ガイドとして協力をお願いしていく予定です

【主催・申込先】 NPO法人 夢くりはら21
電話(42)2351 (土・日曜日を除く)
【協力】 くりはら研究所・栗原市観光協会・くりはらツーリズムネットワーク

第5回栗原市写真展 特別企画 写真展 栗原の魅力

～食は地域を知る一番の近道～

【日時】 3月3日(土)～11日(日)
午前9時～午後5時
※月曜日は休館
※最終日は午後1時まで

【場所】 栗原文化会館・資料室
【観覧料】 無料
【展示数】 約30点

恵まれた自然環境が育んだ多くの食材、人々の知恵と工夫から生まれた食べ方とそれにまつわる暮らし方を紹介し、栗原の食の魅力や地域文化、風習、景観の美しさなどを、くりはら研究所で撮影した写真や文章で伝えます。

同時開催 「世間遺産」写真展

写真家・藤田 洋三 氏の眼差し

写真家 藤田 洋三氏が栗原を訪れた際に撮影した、「ねじりはんによ」や「長屋門」などの作品約10点を展示します。

○藤田 洋三氏プロフィール
大分を拠点に、全国の線絵、土壁、薬塚、石積みなどの景観と取材を続けている。栗原市では、「くりはら観光塾」の講師として、地域資源の観光、観つけ方について講演。
(共催) 第5回栗原市写真展実行委員会

【発行】くりはら研究所 (栗原市 産業経済部 田園観光課)
〒989-5612 宮城県栗原市志波坂新郷谷284番地3(JRくりこま高原駅内) tel.0228(22)1151 fax.0228(23)5370
mail kanko@kuriharacity.jp url http://www.kuriharacity.jp/ (栗原市ウェブサイト⇒市政情報⇒くりはら研究所)

3. 栗原市における地域活性化を担う関係者や理解醸成を図る人材の推進体制等

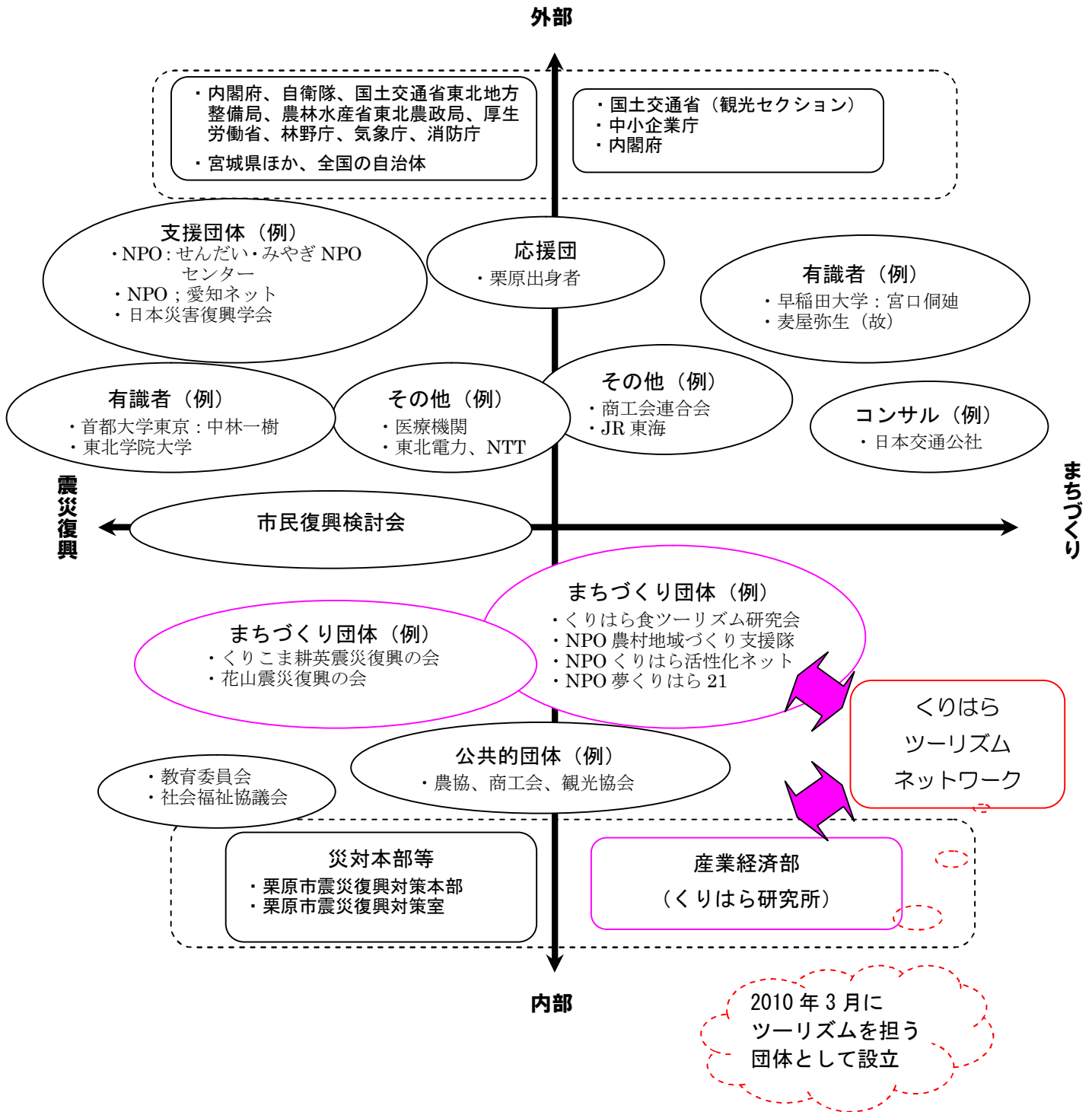
(1) 関係者整理

- 行政は岩手・宮城内陸地震の発災前からツーリズムを推進していたが、震災の影響により復旧・復興に注力することとなる。
- 現在、「産業経済部田園観光課（くりはら研究所）」が地域づくり活動を展開しており、2010年3月にはツーリズムの推進組織として地元関係者により「くりはらツーリズムネットワーク」が設立された。
- 「くりはらツーリズムネットワーク」では、ツーリズムの啓発・普及、ツーリズムの研修、情報交換・収集、人材育成等を主な活動内容としており、81会員（個人51、団体27、賛助3）で構成されている。
- 行政と市民の中継役、市民のツーリズム活動の支援組織として活動しているが、当初より具体的な目標設定を行い、活動の幅を広げていることが特徴として挙げられる。
- 「くりはら博覧会“らいん”」の実行組織でもあり、広く市民にも認知されるようになってきている。

(2) 具体的取り組み

- 田園観光都市室（くりはら研究所）は、新しい栗原市の観光産業づくりのための調査と田園観光都市づくりの企画を行っており、第一期（平成18年10月からの一年半）は合併当初ということもあり、主に市民を対象にして魅力の気づきを促す事業を展開。特に、市役所職員や市民の意識改革、行動する人づくりを目指したのもあった。
- 次に外部の風・視点を導入するとして国土交通省の若者の地方体験交流支援を実施。若者とその関係者である学識経験者・専門家等とのネットワークも確立することができ、「くりはら輝かせ隊」の活動内容も向上し、地域住民に対し栗原市は「観光産業づくり」を目指しているという印象を強く植え付けることができた。
- 今後は、受入れ体制づくり、販売宣伝ツールの見直し、ニューツーリズムの商品化を行う予定である。そのため現在、より多くの人の巻き込み、地域リーダーの育成並びにそれを支える支援のあり方等のいわゆる人材発掘・育成について積極的に検討を行っている状況である。

◆震災復興・まちづくり関係者



②シンポジウム・ワークショップ内容

1. 栗原市シンポジウム・ワークショップ実施概況

1) 日時・場所等

- 日時：平成23年12月23日
- 場所：一迫ふれあいホール（住所：栗原市一迫真坂高橋 20-1）

2) テーマ

- 「地域活性化への理解醸成」シンポジウム・ワークショップ（栗原市観光産業づくりシンポジウム）

3) 構成

- 実践的なワークショップを交えたディスカッションを行うことで議論を深めるため、全体を3部構成とする。

<シンポジウム・ワークショップ構成>

シンポジウム	第1部	宮口先生による講義 「地域の価値の再認識（学び）と人材の育成」 ・他地区事例等を活用しながら地域づくり活動の意義、連携・協働の方策・課題、地域づくり担い手予備軍の発掘・巻き込み方等
	第2部	くりはらツーリズムネットワークに所属の活動団体を中心に活動紹介（4団体）1団体：10分 ・団体プロフィール、活動内容、活動メリット等を紹介するほか、参加方法等も説明
ワークショップ	第3部	・「くりはら博覧会“らいん”」体験型ワークショップ・勉強会 ～身近な地域資源の価値について再認識していただくことや、資源を活用したツーリズムの必要性等のほか、地域の担い手として今後積極的に参加していただくきっかけとした～ 3グループ実施。 ①干し大根づくり体験 （体験指導）くりはら食ツーリズム研究会 ②ミニ畳づくり体験 （体験指導）有限会社 只見工業所 ③蓮クラフトづくり体験 （体験指導）山谷 信子 氏（蓮クラフト作家） 体験終了後、グループ毎に1テーマについて議論を行い、それぞれのグループから発表。 ・テーマについては以下の通り、 1. 地域の担い手としてできること、地域資源・特色を活かした取組・事業を考える。
まとめ		宮口先生による総括

2. 栗原市シンポジウム・ワークショップ結果の概要

1) 講師講演「地域の価値の再認識（学び）と人材の育成」（早稲田大学 宮口教授）

● 自らの地域を語れるようになる

- ・地域の持つ価値を育てるには、その地域に何があるか、それにはどんな意味があるのか、本には書かれていない学びが必要。人を育てる前に自らが育たなければならない。



● 日本を再認識

- ・日本の自然の中で人々が手間をかけて日本の風景を作ってきた。

また、日本は世界の森林大国で、日本の田んぼはヨーロッパの畑の8倍の生産性がある。それは日本にしかない価値である。しかし一方では、日本全体の経済成長の中で農業の価値は下がり続けている。ヨーロッパでは農業は基盤を支えているものであるという合意があり、予算による下支えがある。そのため、農業の規模拡大が進んだ。それは日本が学ぶべきところである。

● 系列化の時代にいかに生きるか

- ・都市の産業が栄えて、若い人たちが流出する時代も過ぎ、今は都市の大きな企業が地方の産業まで系列化するようになった。それに対する抵抗としては、大きな都市では作れない地域資源を持つこと、育てていくことが必要。地域づくりとは、その地域に今の時代にふさわしい価値を時間をかけて積み重ねていくこと。

● 人と資源をどう育てるか

- ・活性化しているとは、いろいろな反応が起きて何かが生まれやすい状態になっている状態。そのためには人と人が接触し、いろいろな働きかけを行って動きを作り出す、議論や学びが大事。それは行政の役割でもあり、栗原では田園観光課をつくり働きかけがされてきた。また、その中にできるだけ新しい世代を巻き込んでほしい。

● 地域は単に客観的な存在ではない

- ・温泉がある、ない、などの客観的な条件よりも、あるものをどう使うかという技、工夫が必要。今は地域の人々がそれぞれの能力を発揮しなければ物事が動かない時代である。人と人をつないで力にするには、人材を把握しておかなければならない。隠れている人材を発掘するための場も必要。

● 次の世代をどう育てるか

- ・地域の高校、高校生が何を学び、どうやって育てていくかも、世代間のいい関係をどのように創っていくかが地域の将来にとって大きなテーマである。

2) ワークショップテーマ「地域の担い手としてできること、地域資源・特色を活かした取組・事業を考える」

◆上記のテーマを元に、グループ毎にディスカッションを実施。

【ミニ畳づくり体験グループ】

- ・新しい“らいん”のプログラムを作ることを討議。
- ・うまいもの、栗原の歴史、栗原の拠点を歩く散策、宇宙・ETとの交流、伝統文化、栗原の自然を大切にする、スポーツ、と大きく7つに分けた。
- ・栗原は、餅など、郷土料理の豊富なところなので、目玉としてこれからのうまいものを加えて頂きたい。



【干し大根づくり体験グループ】

- ・今回、干し大根づくり体験において皆で話し合いをする中で、栗原市には非常に多くの保存食があることが分かり、実際栗原市にどれだけの保存食をみなさんが作っているのかをあげてもらった。
- ・一年中好きなときに食べられるのが保存食の魅力。
- ・栗原市にたくさんある保存食を使って何をして行こうかを検討。
- ・保存食を用いて手がけていきたいことの例：栗原特産の保存食の店、地域素材を生かした農家レストラン、教える人のシステムづくり、外部からお客様を招くシステムづくり、保存食の体験教室、保存食のコンテスト。
- ・保存食コンテストのアイデア：県外からでも市内からでも誰でも参加できる、優勝した保存食は新たな栗原市の特産物化、商品化ができる。



・コンテストから派生して、保存食を作るのに必要な道具の作り方、食材の調達の方法・生産の技術、保存食の作り方・調理の方法を教えてくれる先生をお招きするなど、さまざまな活動ができるのではないだろうか。

・コンテストを開催するにあたり、将来的には保存食コンテストの全国大会や保存食のホーム

ページ・ツイッター作成、ホームページ上での生中継などを行うとよいのではないだろうか。

【蓮クラフトづくり体験グループ】

- 大きいテーマとしては「子供が地域に求めるもの」、サブテーマを「子供が活躍する場」として、高校一年生の気持ちで話し合った。
- 課題は、スポーツを楽しんでいる時期、通学が不便（特に冬場）、カラオケで歌いたいのにあまりない、気軽に入れるコーヒーショップがない、友達と研究したり町づくりに参加したい、ということが挙げられた。
- 現実には、学校に対する不信感、宿題が多い、外で思い切り遊びたい、自分の時間が少ない、いろんな体験をしてみたい、地域に子供が少ない、将来への期待と不安、親への反発、など、怖いもの知らずで、なんでもできる年齢だと想定した。
- 希望・要望は、校長先生とお昼を食べたい、地域のイベントに積極的に参加してみたい、自分の目標を見つけたい、楽しい勉強がしたい、月に一回くらい観劇したい、高校生活の一年間寄宿舎生活をしたい。
- 結果としては、カラオケの送迎バスあればよいのでは、地域の祭りに参加のみならず、企画・運営を高校生にしてもらうとよいのでは、高校生のアイデアを聞きながら進めていけば活性化につながる祭り・イベントができるのではないか。



(2) 宮崎県小林市

①これまでの取組

宮崎県小林市

小林市は平成 22 年に合併をしているが、まちづくり活動等は旧市町村単位、業界団体、地縁団体別等でそれぞれ実施されていた。合併並びに現市長の就任をきっかけに協働のまちづくりに取り組む。現在、地域づくり活動に参画していない人に対しても参画を促す体制・仕組みの構築に奮闘中。

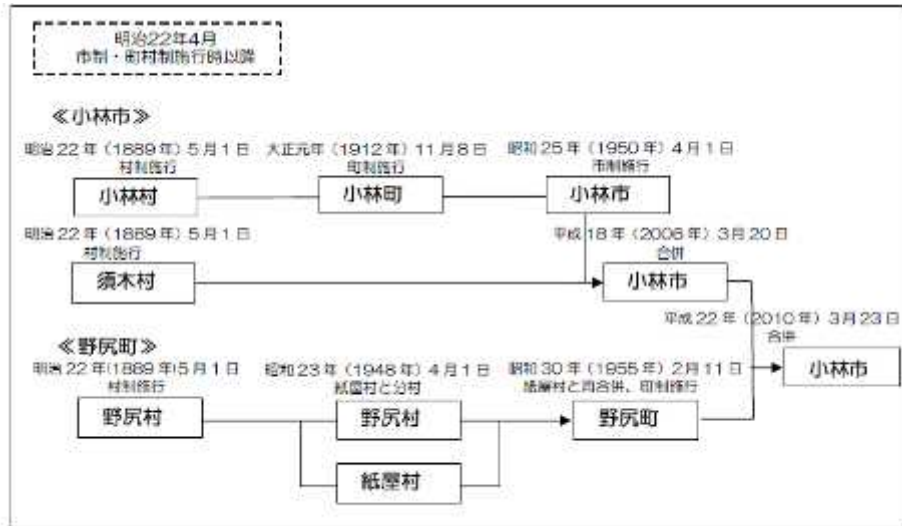
1. 小林市概要

- 人口：47,921 人（平成 24 年 1 月 1 日現在）
- 行政面積：563.09 km²
- 小林市は南九州のほぼ中央部に位置し、北は熊本県、南は鹿児島県に接している。市内を囲むように九州山地、霧島山系が連なる山に囲まれた地形であるため、昼夜間の気温差や夏と冬の寒暖差が大きく、温暖な宮崎県でありながらも降雪が見られる。
- 平成 18 年 3 月に旧須木村と、平成 22 年 3 月には旧野尻町と合併。
- 平成 23 年 2 月 14 日午前 5 時 7 分、新燃岳が噴火。市内では噴火に伴う飛散物によって、車のガラスや太陽光パネルの破損等の被害が報告されている。火口から概ね 3 キロ程度の範囲まで火砕流が流下する可能性があると言われており、噴火警戒レベルは現在でも引き続きレベル 3（入山規制）が継続されている。

小林市位置図



小林市合併経緯



2. 小林市における地域活性化の取組概要

(1) これまでの地域活性化の取り組み経緯

- 合併前から中心市街地活性化・観光地形成等をキーワードとしたまちづくり活動は行っていたが、計画策定等に関しては都市計画コンサルタントに全面的に委託するケースが多く、いわゆる行政主導型のまちづくりであった。
- 例えば、小林市の中心市街地の再生を図るとして、平成16年度より、まちづくり交付金を活用して小林駅周辺地区を対象としたまちづくりや観光活性化事業等を行っていたが計画等をコンサルタント業者に委託して策定するなど、行政主導で行われたため若干、市内の実情に沿ったプランニングや事業創出まで至っていない等の状況が見られた。
- 行政以外においても農協、商工会議所、NPO等が主体となり、まちづくりイベント等は行われていたが、それらの主体が連携してまちづくり活動を行うことはほとんどなかった。
- 小林市としては、平成22年の合併を機に、各主体が連携して一体的にまちづくり活動に取り組むことを期待したが、自発的に連携される動きはなく、旧村・市のリーダーレベルでの会合等を開くなどしたが連携は進まない状況であった。
- その状況を鑑み、現市長は「まちづくりに関しては市民と協同して実施することが必要である」とし、行政と市民、市内に存在するまちづくり活動団体等との連携素地を作ることに注力した活動を展開しているところである。

(2) これまでに実施されてきた主な地域活性化の取り組み概要

○観光振興に関する取り組み

- 平成 5 年、旧小林市時代に観光開発計画を策定。しかしながら、旧須木村、旧野尻町においては観光振興計画等の策定は行われておらず、行政間においても取り組みに温度差があり、旧小林市時代も含め実際は、市内の各施設（キャンプ場、ゴルフ場、温泉施設、観光農園等）の自助努力によって観光客数を確保してきたにすぎない状況であった。
- しかしながら、平成 20 年、霧島連山を中心とする環霧島地域をユネスコが認定するジオパークとして登録することで地域活性化を図るという機運が高まり「霧島ジオパーク推進連絡協議会」（旧小林市、霧島市、曾於市、都城市、えびの市、高原町）が設置された。
- 平成 22 年 9 月に日本ジオパーク委員会において正式に認定されたことにより、観光振興への弾みがついたとしている。
- 同時期に、平成 23 年度観光基本方針を「地域の活力を創出する産業交流のまち」として定め「観光・レクリエーションの振興」を図ることとし、成果指標（めざすっ度）を策定した。
- 観光推進を進める NPO 等の団体や住民の協力体制も評価項目に入っており、活動如何によっては認定を取り消されることもあるため、NPO や住民による具体的な取組体制の構築等が必要になる。

めざす度の項目



○中心市街地再生の取り組み

- 平成 16 年度より平成 20 年度まで、まちづくり交付金を活用し小林駅周辺の区画整理事業（対象面積：28.7ha 交付金額：822 百万円）を中心としたまちづくりに取り組む。
- 当時の整備目標としては以下のとおり。
 - ・ 小林市の中心部に良好な環境の住宅地を提供し、都心へ人々を呼び戻す。
 - ・ 南北の市街地の交流を促進し、駅北側中心市街地の活性化を促進する。
 - ・ 小林駅の南側を文化交流拠点として、高質で利便性の高い空間として整備し中心市街地の再生の先導を果たす。
- 整備結果として、接道不良宅地の解消や公園の整備によって、良好な住宅地としての基盤を創出することができ、居住者の満足度が上がったことが挙げられる。なお、基本的に計画は行政主導であったものの、個々のプロジェクトには住民・NPO によるワークショップを複数回開催しながら進めたためまちづくり機運を高めることができたとしている。
- しかしながら、本事業は中心市街地の再生を主目的とするものであり、駅前を中心とする住民等のまちづくり機運を高めることはできたものの、小林市全体へ如何に波及させるかが今後の検討課題となっている。

まちづくり交付金を活用した対象エリア・事業



3. 小林市における地域活性化を担う関係者や理解醸成を図る人材の推進体制等

(1) 関係者整理

- 前述のように、比較的自治体主導によりまちづくりが展開されてきたが、そのほか、地域活性化を担う関係者としては農協、商工会議所、NPOが挙げられる。
- しかしながら、それぞれ独自に産業や観光の観点でイベント・事業等を実施している状況であり、関係者間で協働や連携をテーマとした活動は具体的には実施されていなかった。
- 特にNPOにおいては小林市内に複数存在しているが、集まる場所・機会等がなかったためNPO間での協働も積極的には行われていなかった。
- 今後、地域活性化への取り組みに対する理解醸成を図りたい人物としては高校生・大学生等の次世代を狙いながらも、まずは現役世代で地域活性化活動に参画していない地域住民全員を対象にしたいと考えている。

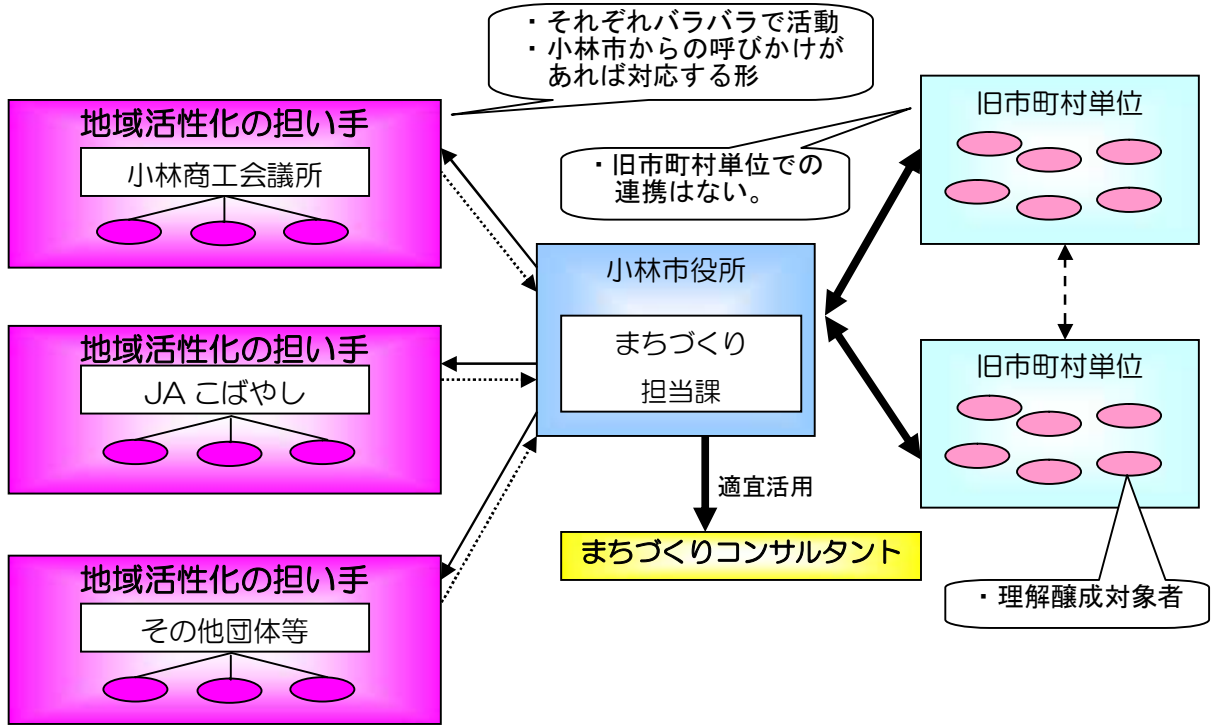
(2) 具体的取り組み

- 現市長により“協働のまちづくり”をテーマに地域活性化を促進させる推進体制や機運醸成等が図られている。
- 平成23年にはNPOやまちづくり団体等に対して情報提供、活動スペースの貸与等を行い連携を促すとして市民活動促進センターを設置。現在57団体が加盟しており、将来的には地域協議会との連携も視野に入れている。(詳細は後述)
- 今後は、これまで地域活性化に関する活動に参画していなかった地域住民が積極的にまちづくりに参加することができる体制を構築するとして地域協議会を設立する予定である。
- また、地域活性化・再生を手掛けたことのある学識経験者の方から協働・連携の必要性を教授してもらうとともに客観的な視点で小林市を分析してもらうことが必要だとして、行政、NPOやまちづくり団体等、地域住民の仲介役として大学を活用しており、今後も活用する予定。(小林市活性化研究会を設置)

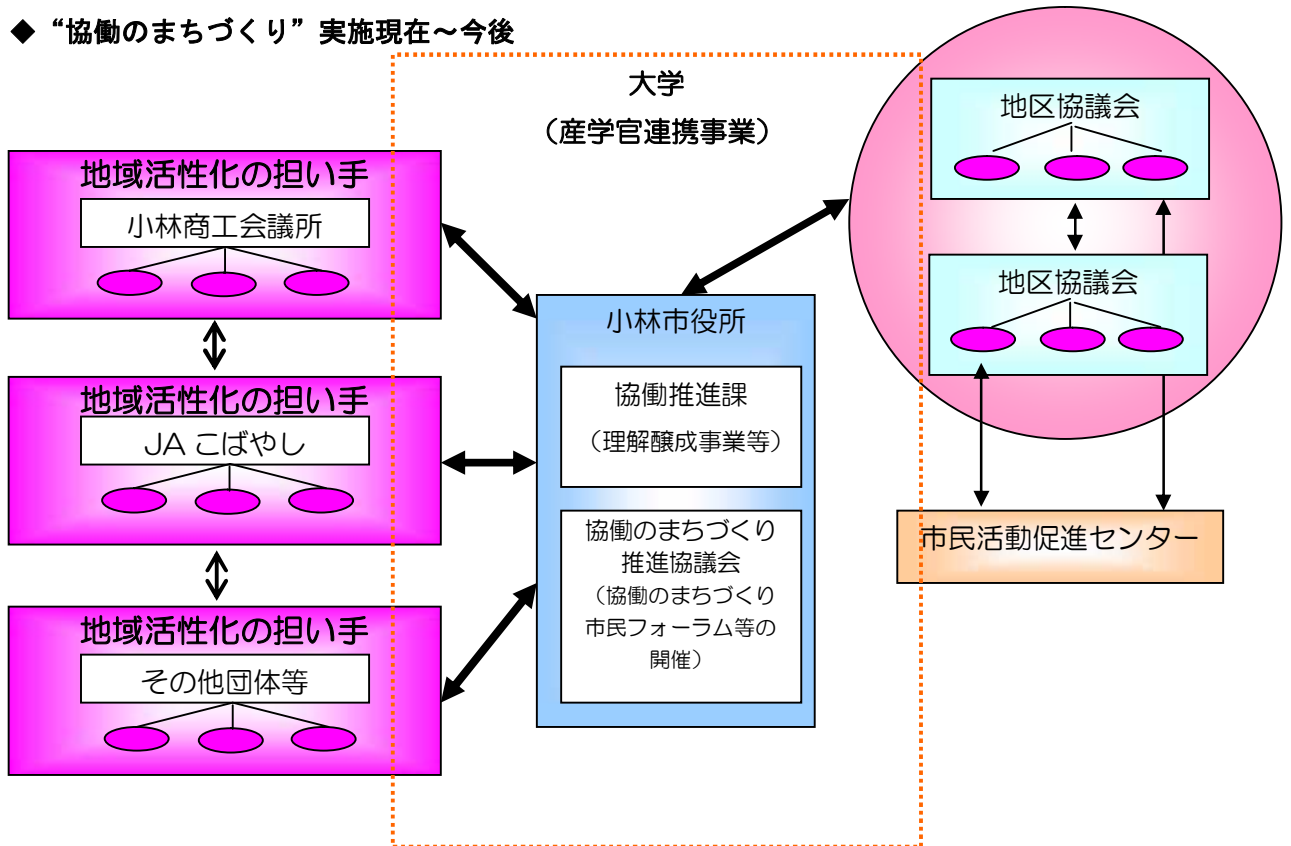
小林市活性化研究会所属団体

- ・ 小林市商工会議所
- ・ 小林市農業共同組合
- ・ 小林市観光協会
- ・ 小林市商店街連合会
- ・ 小林市社会福祉協議会
- ・ にしもろこげんす会
- ・ エコワールドきりしま

◆ “協働のまちづくり” 実施前



◆ “協働のまちづくり” 実施現在～今後



②シンポジウム・ワークショップ内容

1. 小林市シンポジウム・ワークショップの概況

1) 日時・場所等

- 日時：平成23年11月2日
- 場所：小林市役所会議室（住所：小林市細野 300 番地）

2) テーマ

- 「地域活性化への理解醸成」シンポジウム・ワークショップ（小林市活性化事業シンポジウム）

3) 構成

実践的なワークショップを交えたディスカッションを行うことで議論を深めるため、全体を3部構成とする。

<シンポジウム・ワークショップ構成>

シン ポ ジ ウ ム	第1部	細野先生による講義 「まちの“にぎわい”を考える」 ・他地区事例等を活用しながら地域づくり活動の意義、連携・協働の方策・課題、地域づくり担い手予備軍の発掘・巻き込み方等
		細野ゼミ生による中間報告 ・小林市の調査結果の中間報告、他都市との参考事例紹介等
	第2部	地域づくり活動団体の活動紹介（3団体）1団体：10分 ・団体プロフィール、活動内容、活動メリット等を紹介するほか、参加方法等も説明
ワ ー ク シ ョ ウ ッ プ	第3部	地元若手、中堅、行政関係者によるワークショップ ・3グループに分かれて、3テーマについて議論を行い、それぞれのグループから発表。 ・テーマについては以下の通り。 1. 地域の活性化を図る具体的な方法や突破口 2. 農業の6次産業（化）を活かした地域の活性化 3. 小林、須木、野尻の地域資源・特色を活かした取り組み
	まとめ	細野先生による総括

2. 小林市シンポジウム・ワークショップ結果の概要

1) 講師講演「まちの“にぎわい”を考える」(中央大学 細野教授)

● 賑わいをどう考えるか

- ・町が賑わいを生むためには売りが必要。そのためには①ハードとソフトの二つがマッチしなければならない。②人が多く集まらなくてはならない。③あれもこれも、ではなく一つに集中する。④情報を活用する。苦情のような情報でも活用して次につなげれば進化する。
- ・どういう形でにぎわいを作るか、いつでもにぎわいを作り出すことができることが大事
- ・にぎわいは意識変革の手段。人と人が顔を合わせるといろいろな考え方が生まれる。それにより考え方が変化していく、それが意識改革となる。
- ・にぎわいは多様な人達の協力がなければ創出できない。その中で、どういう町の時間のリズム、人の流れを作るかが大事。
- ・町のイノベーションには六次産業化が重要。六次産業は掛け算である。1次、2次、3次のどれか一つが振るわないと、ほかが頑張っても限りなくゼロになってしまう。すべての産業がバランスをとり、どのように掛け算の大きな数にしていくのか、を考えていただきたい。



2) ワークショップテーマ「地域の活性化を図る具体的な方法や突破口」「農業の6次産業化を活かした地域活性化」「小林、須木、野尻の特色を生かした地域づくりの手法を考える」

- ◆上記3つのテーマそれぞれについて、グループ毎にディスカッションを実施。

<テーマ1：地域の活性化を図る具体的な方法や突破口>

【1班】

- ・突破口としていろいろなアイデアを出してもらうことにした。
- ・お嫁さん不足や農業体験を婚活につなげること。
- ・高齢者への対策として走るマーケット
- ・観光ルートが確立していないのもっとPRをする。



- ・ コンシェルジュを設置する。
- ・ 地方をもっと見てもらうために努力する。
- ・ 高齢者への対策として御用聞きを受ける、若い人、高校生などとの懇話会。

【2班】

- ・ 小林のそのままの自然、そのままの産業をアピールする。
- ・ 小林の自然の農産物を活かす事業を行う。
- ・ 地域の人が集まる場所、高齢者が集まる場所、地元の場所が気軽に集まる場所づくりを大切にしたい。
- ・ 自然・産業を生かして、地元の食を活用して人が集まる、伝承することが大切
- ・ 地域の子供、小学校などと地域の関わりを作る。
- ・ 小林の産業、農産物を生かし大切にして産業を活性化して、人の集まりにつながるということが大切である。

【3班】

- ・ ハード事業は、いいことなのか、それがもうふさわしくない時代なのか、ということとはわからないが、そういうことを議論する時代になった。
- ・ すでに取り組んでいるソフト事業として、企業誘致、ジオパーク、移住者誘致、米・農産物のブランド化が挙げられる。まだ取り組んでいないソフト事業として、グルメの開発、農産物のネット販売、直売所、大規模なスポーツイベントが挙げられる。
- ・ 突破口を経済的な効果と考えると、お金のかからないやり方としてはソフト的なグルメの開発、農産物をさらに伸ばしていくことが突破口になるのではないかと。
- ・ グルメの開発については飲食店や生産者の情報交換の場が必要であるので、そういうものを創っていかなければならない。

<テーマ2：農業の6次産業化を生かした地域活性化>

【1班】

- ・ 6次産業とは、農家が生産・加工・販売まで一貫して行うものだが、1班では、農家だけではすべての工程を行うのは厳しい面があるという意見が出た。
- ・ 資源として、メロン、水、お茶、栗、マンゴー、などいろいろあるが、商品開発から加工までできる農家もある一方で、加工技術がほとんどない農家もある。加工に際してはJA、商工会議所、行政、NPOの協力を得て行おうという動きがある。
- ・ 販売方法も農家で行うのはなかなか難しい。その調整役として、JA、商工会議所、企業等の力を借りて順繰り回していく。

【2班】

- ・ 2班は金持ちになりたいということがテーマ。個人が金持ちになることは市が金持ちになることにつながる。

- ・生産については、これからの農業の担い手を確保する、若い人が育つ環境を確立しなければならないということが課題。
- ・生産のためには、何を作ったら売れるかではなく、何を作ったら買うのかに着目すべき。生産者と購入者の交流会、意見交換会を行い、消費者のニーズに合ったものを作れば放っておいても売れる。おいしい牛肉を作る若いスタッフを増やす、民泊などによって体験をしてもらいながら生産に対する意見をいただき、それを参考に生産する。



- ・須木は中山間地域で山が主体なので、しいたけ、ゆずのほかに、害獣であるイノシシ、しか、たぬきなども一つの生産につなげていけないか。
- ・加工に関しては、よそに頼むのではなく市に住んでいる人たちが知恵を絞りあって、施設を作って加工したものを外に売る。
- ・小林の地の利である自然、湧水を使った米づくり、水を使った特産品を積極的に作る。その加工には、地域の人たちの昔ながらの料理や、料理に取り組んでいる人たちの意見を集約して新たな小林のブランドを創っていかなくてはならない
- ・せっかくイノシシ肉、シカ肉があるので、これを使っておいしい料理の研究も行いながら、地域の人たちに知ってもらう機会として野尻のメロン祭り、小林のぶどう祭り、牧場の桜祭り等のイベントを引き続き行うことが大事である。
- ・販売については、自分たちで作った自信作をいかに PR して、付加価値をつけたものを自分たちのつけた値段で売れるかということに金持ちになる鍵がある。そのためには、販売ルートを明確にし、小林の特産品を売る場所を都会や外国まで広げて、きちんと売っていくというところまで真剣に取り組まなければいけない。
- ・そのためには郷土出身者による PR や、マスコミを使った PR などいろいろな手法を使った売る体制を構築することが必要である。

【3班】

- ・「内」は、「小林に来てもらう」という意味。例は、おにぎり屋、卵かけごはん屋、販売施設、などを作り、足を運んでもらうなど。
- ・「外」は、小林市外の人が多く手にするような加工品。化粧品、化粧水、石鹸、コンビニと提携してプライベートブランドの製品を作ってもらうなど。
- ・「中間」は、小林に来て買える、市外でも売れる商品。マンゴージュースなど、B 級品や規格外品を集めて加工品やお菓子を作る。有害鳥獣を利用して加工品を作るなど。
- ・結論は、展望台などの箱ものを作るのもなかなか難しいため、B 級品を使った加工品

を作ること、小林という名前を広めるアイテムになる。小林というブランドを持った加工品を作れば市の活性化につながるのではないかと。

- ・6次産業という意味では、小林で作ったものを小林で加工し販売まで行うことでよければよいのではないかと。

<テーマ3：小林、須木、野尻の特色を生かした地域づくりの手法を考える>

【1班】

- ・旧小林はコスモス、野尻はメロンフェア、須木は軽トラ市と吊り橋など、小林、野尻、須木の特色を洗い出した。
- ・環霧島という枠組みも大切な一つの要素である。霧島から小林へのルート、綾から小林へのルートでお客さんを引き込まなくてはならない。
- ・それに対する取り組み、事業としては、お茶グランプリ、B級グルメ、イベント開催、市民茶会、鯉祭り、ゆるキャラを作る、軽トラ市、がねコンテスト、鯉玉とんも食べられるこい祭り、茶節の紹介（観光客に無料で配布、味のアレンジ、ちやぶコン(茶節のコンテスト)）、もーもー市、餅勧進、といった具体的な事業が出た。
- ・茶節とは、鯉節の中に味噌を入れてお茶をかけるだけの簡単なスープのようなもので、観光客に無料で配布したり、味のアレンジを考え、最終的にはコンテストを行う。
- ・鯉玉とんは、霧島ジオパークの公式井として霧島ジオパーク推進連絡協議会から認定されたもので、ご飯の上に味噌ベースで煮たの豚肉を乗せ、温泉卵を乗せてその上にネギをかけ、鯉こくの汁をかける。鯉と卵と豚肉でこいたまとん。この鯉玉とんを食べられるこい祭り、鯉と恋をかけた婚活事業にもつなげる。
- ・メロンなどのゆるキャラを作る。
- ・軽トラ市では、宮崎は川南のトロントロンが有名だが、そういったものを小林でも定期的に行う。
- ・小林には餅勧進という風習があり、これもひとつの起爆剤になるのではないかと考えている。

【2班】

- ・綾から須木、つまり宮崎から須木、小林、霧島を経て野尻、宮崎へと周遊する事業を行う。
- ・まず、須木の方から1.5車線を実現し、宮崎から小林への流れを作る。そして北霧島を経て小林、野尻、宮崎へという流れの中で事業を展開する。
- ・綾の照葉樹林を楽しんだ後、自然の中を移動しながら須木に行き、須木の産品である栗、しか肉、ゆず、わらび、ぜんまい、椎茸、岩魚などを楽しむ。そして小林では湧水の町を楽しむ。また、石窯を作りつつピザの美味しい町を作りたい。

- ・この事業を実施する主体は農家で、民泊を中心に 2 泊 3 日の事業とする。今、小林にくる方の滞在時間は約 2 時間。日南の飫肥城では 1.5 時間。なぜかという、飫肥城ではお城を見て町を歩いて 2 時間過ごす、小林は、1 カ所見て 2 カ所目が離れているから 2 時間かかる。そこで、2 時間ではなく 2 泊 3 日の滞在の事業とする。特徴としては、2 泊 3 日で地元の特産物を食べ、湧水、秋祭り、野尻湖を楽しんでもらう

【3班】

- ・3 班の結論は、農業を中心とした事業とする。
- ・須木はゆず、野尻はメロン、小林は梨、ぶどうなど、今ある、ある程度有名な農産物を活かし、ワイナリーを作ったり、のじりこびあいで物産展を開催したり、スイーツを開発する。
- ・農家の民泊については修学旅行を誘致する。小林インターにも近いので、そのまま長崎の平和の勉強にも行けるだろうし、もともと民泊を進めている素地もある。
- ・この班のコンセプトをあるものを生かす、ということで、すべての町のいいところを集めた、核となる事業を行えば、合併の一体感も生まれるのではないかと。



(3) 事業アンケート

【調査概要】

■アンケート目的

- ・ 宮城県栗原市、宮城県小林市において、本事業に参加した方々の地域づくり活動等に関する興味や参加意向について把握する。
- ・ さらに、本事業実施後に参加者に対してフォローアップアンケートを実施し、参加者の意識、理解、行動変化について把握する。

■アンケート対象

- ・ 2箇所で開催したシンポジウム・ワークショップ参加者を対象に実施した。

■アンケート回収数

宮城県栗原市アンケート： 19 回答

宮城県小林市アンケート： 18 回答

宮城県栗原市フォローアップアンケート： 14 回答

宮城県小林市フォローアップアンケート： 18 回答

■アンケート実施方法

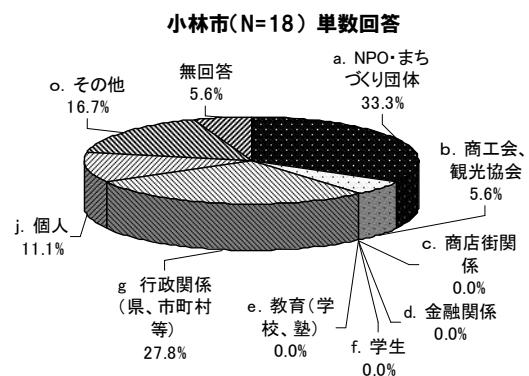
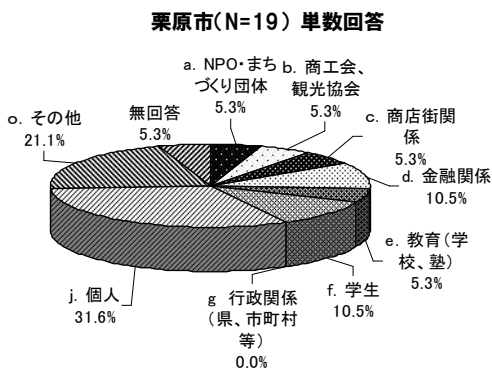
- ・ 各地で開催したシンポジウム・ワークショップ参加者に事前にアンケート用紙を配布し、終了後、その場で回収する方法をとった。
- ・ フォローアップアンケートに関しては、郵送方式とし、メール・郵送で回収する方法をとった。

【アンケート結果】

1. ご自身のことについて

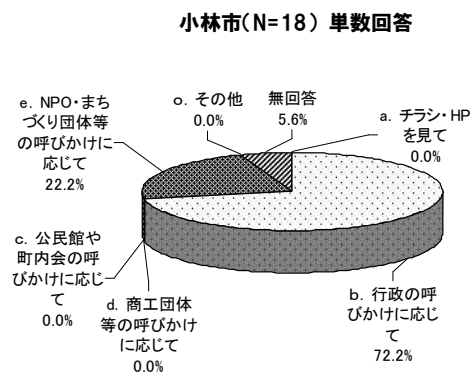
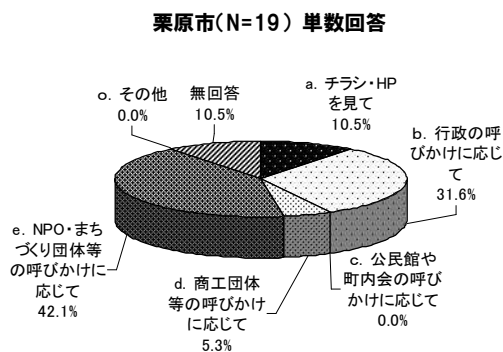
■回答者の属性（問1）

- ・回答者の属性を見ると栗原市では「個人」との回答が最も多く、小林市では「NPO・まちづくり団体」との回答が最も多い。
- ・なお、栗原市においては次世代の地域の担い手として「学生」の参加もあった。
- ・「その他」の回答者としては、両市ともに団体職員等が挙げられた。



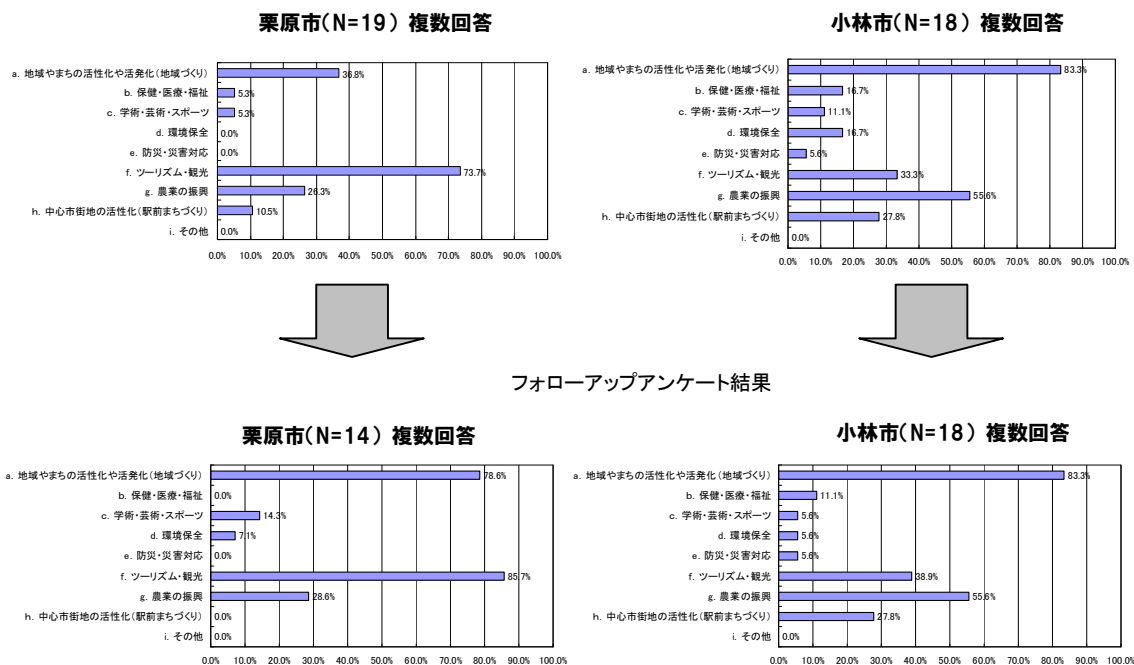
■参加経緯について（問2）

- ・参加経緯を見ると栗原市では「NPO・まちづくり団体等の呼びかけに応じて」との回答が最も多く、小林市では「行政の呼びかけに応じて」との回答が7割を占める。
- ・栗原市では広報誌等を通じて地域住民に幅広く呼びかけたのに対し、小林市では地域の担い手として活躍することが期待される方に対して積極的に広報を行った結果によるものと推察される。



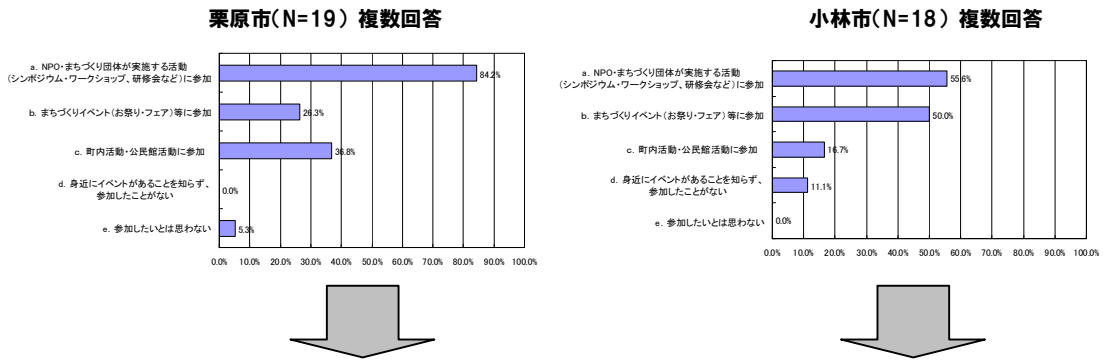
■関心のある分野・テーマ（問3）

- ・関心のある分野・テーマを尋ねたところ、栗原市では「ツーリズム・観光」との回答が最も多く、小林市では「地域やまちの活性化や活発化」との回答が多い。
- ・栗原市においては「くりはらツーリズムネットワーク」が“くりはら博覧会らいん”を実施するなどし、ツーリズムが地域住民にも広く浸透していることが窺える。フォローアップアンケート結果と比較すると、「ツーリズム・観光」に最も関心があるという結果は変わらないものの「地域やまちの活性化や活発化」を意識した回答が増加していることが特徴として挙げられる。
- ・小林市においては“協働のまちづくり”を掲げており、協働の概念はあらゆる分野・テーマに係ることから回答項目が多岐に渡っているものと考えられる。フォローアップアンケート結果と比較すると、「地域やまちの活性化や活発化」に最も関心があるという結果は変わらないものの「ツーリズム・観光」が微増ながらも増加している。
- ・総じて、両市ともに関心のある分野・テーマが絞り込まれてきたことが窺える。

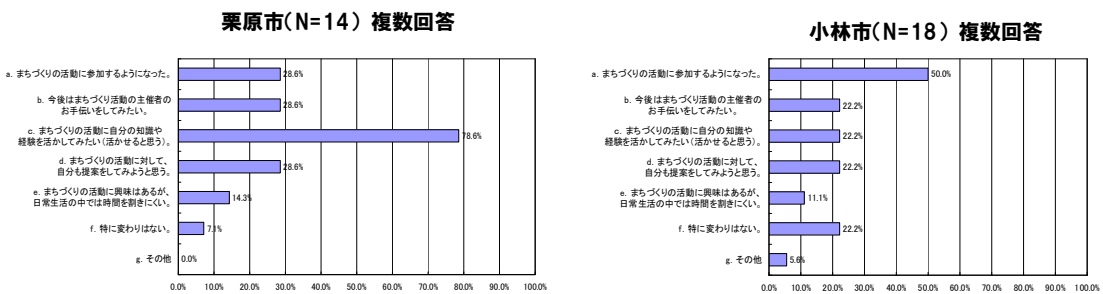


■これまでに積極的又は意欲的に参画・参加した取り組み（問4）

- これまでに積極的又は意欲的に参画・参加した取り組みを尋ねたところ、両市ともに「NPO・まちづくり団体が実施する活動」との回答が最も多い。但し両市の間には28.6ポイントの開きがある。栗原市において高いポイントとなった理由としては“くりはら博覧会らいん”の開催が影響しているものと推察される。
- フォローアップアンケートの結果と比較すると、栗原市においては「まちづくりの活動に自分の経験や知識を活かしてみたい（活かせると思う）」との回答が最も多く、より主体的にまちづくりを行うよう意識が変化している状況が窺える。小林市においては「まちづくりの活動に参加するようになった」との回答が最も多く、本事業への参加は行政の呼びかけに応じて参加した方が多かったが、その後、自立的にまちづくり活動に参加するようになった方が増えていることが推察される。



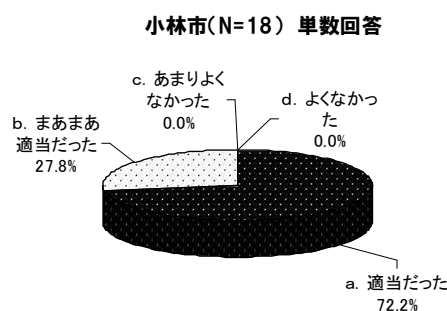
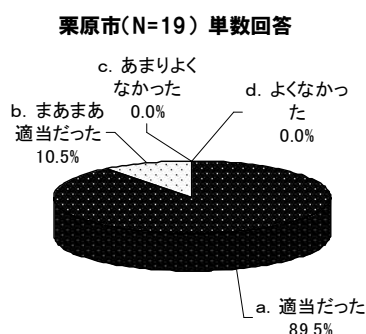
フォローアップアンケート結果



2. シンポジウム・ワークショップについて

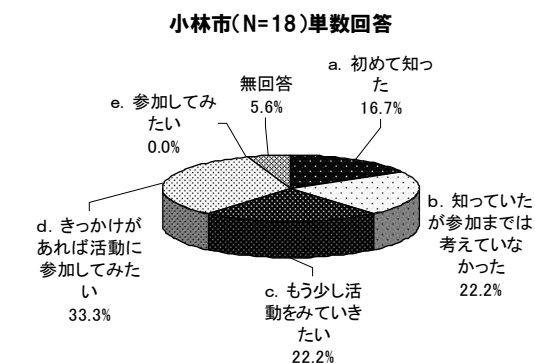
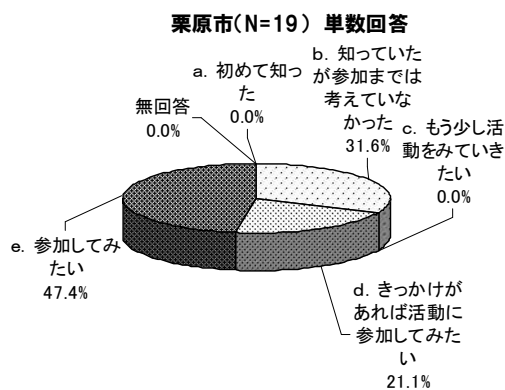
■シンポジウム、ワークショップの感想（問5）

- ・シンポジウム、ワークショップの感想を尋ねたところ両市とも「適当だった」との回答が最も多く、「よくなかった」「あまりよくなかった」との回答は皆無であった。
- ・自由意見には「今後の活動の指針となった」「持続性のある地域資源観光、新しい発想、違う視点が得られた」等のコメントが挙げられた。
- ・総じて、多くの参加者が地域づくりに対しての“気づき”や行動するための“きっかけ”を得られたことが推察される。
- ・シンポジウム・ワークショップの手法は、地域住民に地域づくりに対しての理解や参画意欲の向上を高める効果があると言える。こうした取り組みを継続して実施することで、できるだけ多くの地域住民に刺激を与えることが、地域づくりに対する理解を図る上で重要である。



■地元の活動団体の取組発表の感想（問6）

- ・地元の活動団体の取組発表に関する感想を尋ねたところ、栗原市では「参加してみたい」との回答が最も多く、小林市では「きっかけがあれば活動に参加してみたい」との回答が最も多かった。
- ・栗原市では「初めて知った」との回答が皆無であるのに対して、小林市では2割弱の回答があった。栗原市においてはミニシンポジウム等を開催しており、その告知と開催結果等も広報誌により全地域住民に知らせているため、そうした影響もあるものと考えられる。小林市においては協働のまちづくりをテーマに活動をスタートさせたばかりであり、今後も地元住民と活動団体を繋ぐ広報や取り組みを実施することが期待される。



■地元の活動団体に対して期待すること（問7）

- ・地元の活動団体に対して期待することを尋ねたところ、それぞれ下記のようなコメントが寄せられた。総じて、地元の活動団体に対して好意的なエールが多く、地元の活動団体の存在が大きいことがわかる。地元団体への活動の期待としては、各団体間の情報交換やネットワーク構築を望むコメントが寄せられている。

【栗原市】

- ・発表者の実体験者の話題提供がよくわかりやすく感激した。皆さんベテランでこの栗原市にこんな勉強した方達が残って活動していると知って素晴らしいことと思った。日のあたる立場でない人にも、日（光）をあててますますその方が力を発揮して、良い知恵を出して、栗原の光になれば良いと思う。まさしく、その人材の育成に声掛けをして引き出してほしい。本日の講演も良かった。
- ・積極的にまちづくりを推進したくさんプログラムを作って下さるので、他から来た者でもネットワークが出来、感謝している。少しずつでも覚えいき、退職後の生きがいを見出す糧にしたいと思う。
- ・専門家の先生方のシンポジウムを年1回は必ずお聞きしたい。
- ・地域に根付いた「らいん」による観光振興は、これまでの観光施策とは異なる価値を持った意識ある取り組みだと思う。全国のモデルになるような取り組みになることを期待している。
- ・栗原物産のブランドづくりとくりはらツーリズムネットワーク等との情報を共有できる場があればと考えています。

【小林市】

- ・今の活動を継続維持してもらいたい。
- ・NPOで頑張っていただいているのが心強い。
- ・協働してほしい。
- ・情報交換
- ・活動の目的が合致する団体同士の連携の強化。

■地元の活動団体の話を踏まえた上での自身の考えについて（問8）

- ・地元の活動団体の話を踏まえた上での自身の考えについて訪ねたところ、それぞれ下記のようなコメントが寄せられた。
- ・栗原市では、民泊、ブランド発信等、比較的具体的な項目に対しての知恵やノウハウ等を希望するコメントが多いのに対して、小林市では、地元の活動団体の話を始めて聞く参加者が多かったためか「刺激を受けた」「感心した」とのコメントが多く、本事業への参加が、地域に対しての理解を深める一つのきっかけになったことが窺える。

【栗原市】

- ・「地域おこし協力隊」としてあらゆる活動に参加したいと思う。特に都会から栗原市に来てもらう仕掛けづくり。
- ・小さな町の味のある街並みを見学したい。どのような工夫で実現したかなど、条件、ノウハウなど学びたい。いつかそんな街並み（風情）を出した所を歩きたい。
- ・他地域からの受入れ等をしたい（民泊）
- ・特産品開発等を考える研究会を立ち上げたい。
- ・まず、地域に理解を。地域の事業に積極的に参加。
- ・近代化産業遺産を守る研究会を立ち上げたい。
- ・食を通じて栗原のブランド発信に取り組む。

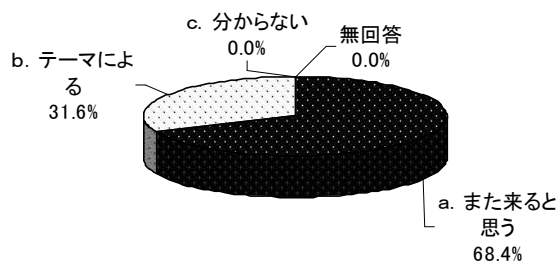
【小林市】

- ・地域活動（づくり）に知恵と方法を教えて欲しい。
- ・地域のために活動していることに本当に頭が下がる。利益にならない部分での活動は非常に大変だと思う。
- ・初めて聞く活動内容もあり、勉強になった。
- ・刺激になった
- ・参加したい内容であった。

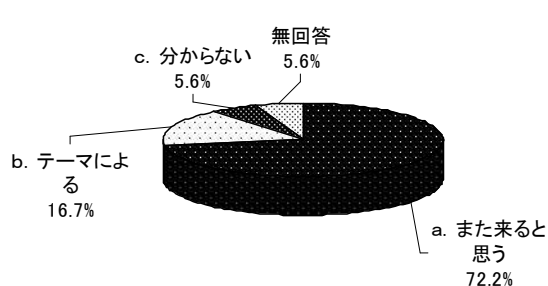
■シンポジウム・ワークショップ等の今後の参加可能性（問9）

- ・参加者の今後のシンポジウム・ワークショップ等への参加可能性を尋ねたところ、両市ともに「また来ると思う」との回答が最も多かった。
- ・こうした意欲が高いうちに次なる仕掛けを行うことが肝要であると思われる。実際に栗原市では栗原ツーリズムネットワークの主催で「近代化産業遺産群観光ガイド養成講座」を実施し、小林市では「一人ひとりが豊かになる小林」と題したシンポジウムを開催するなどし、刺激を持続させるための取り組みを行っている。

栗原市(N=19) 単数回答



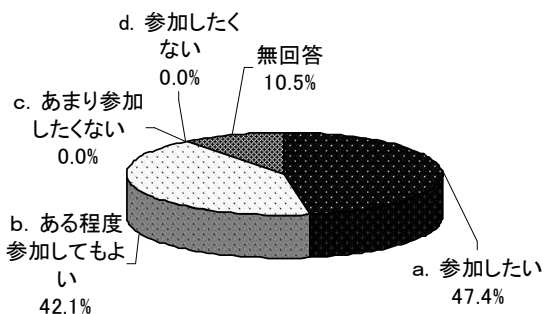
小林市(N=18) 単数回答



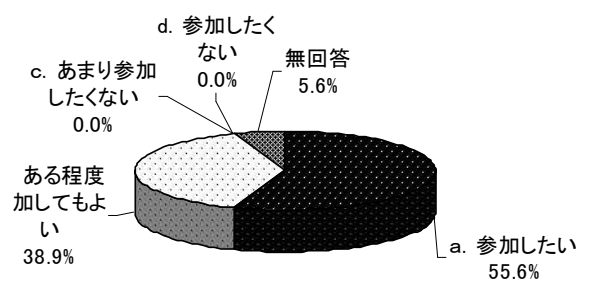
■地域づくり・まちづくり活動への今後の参加可能性（問10）

- ・参加者に今後地域づくり・まちづくり活動への参加可能性を尋ねたところ、両市とも「参加したい」との回答が最も多く、「参加したくない」「あまり参加したくない」との回答は皆無であった。
- ・今回はシンポジウムという座学の場合とワークショップという演習の場合を設定し、地域づくり活動の必要性を訴えるだけでなく、自分自身が何をできるのかを考えて頂く場・機会を創ったことが、取組意欲の向上に結びついているものと推察される。
- ・栗原市では、「知っている人ができたからまちづくりの活動があれば行って見たい」との回答が最も多く、自らがまちづくりについて学び・行動する人材になろうという意識が芽生えたことが窺える。
- ・小林市では、「イベントへ行ってみようなど、周りの人と話をする機会が増えた」との回答が最も多く、まちづくり活動への興味が深まった人が多くいることが推察される。

栗原市(N=19) 単数回答

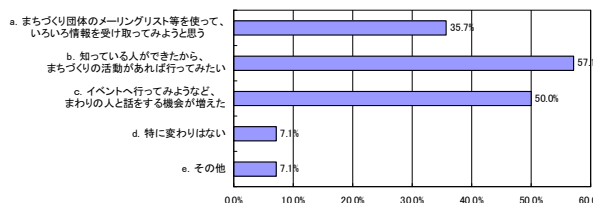


小林市(N=18) 単数回答



フォローアップアンケート結果

栗原市(N=14) 複数回答



小林市(N=18) 複数回答

